

発行所(郵便番号100)
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸の内ビルディング617号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (5412) 0503
Fax (5412) 0549

編集責任者 岡沢 憲 美
印刷所 関東図書株式会社
定価400円(年間購読料四千元)
1997年11月25日発行

No.305 第29巻 10.11合併増刊号
(毎月1回25日発行)
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

No.305 Bulletin Vol.29 No.10.11合併増刊号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.617 Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

国際交流基金，地域・草の根欧州派遣助成事業
障害をもつスウェーデン人と日本人との交流を通じて考える
快適な生活のための社会サポート報告書



平成8年9月 実施

は し が き

本報告書は、国際交流基金、地域・草の根欧州派遣助成事業より当研究所が助成金を受けて実施した、「障害をもつスウェーデン人と日本人との交流を通じて考える、快適な生活のための社会サポート」をとりまとめたものです。

近年、日本において、全国的に障害者や高齢者用の高機能な設備を備えた施設の整備が進むなど、福祉施設のハード面は充実しつつありますが、管理・運営、労働環境などそのソフト面においては、福祉器具の高度化に伴う多角的な機能の要請や、施設利用者のニーズの多様化に必ずしも十分な対応ができていない状況にあります。

このような日本の現状に対応していくために、とりわけソフト面の充実が急務となっていることから、本交流派遣事業は、障害をもつスウェーデン人と日本人との交流をスウェーデンのマルメ市で行い、スウェーデンの障害者を支える福祉体制や障害者施設等に関する現状を把握するとともに、意見交換を行います。また、地方公共団体の福祉制度の在り方を調査研究し、今後の検討の基礎資料とすることを目的としたものであります。

草の根交流の実施に際しましては、国際交流基金の職員の方々をはじめスウェーデン滞在中にご協力いただいた関係機関にご指導・ご協力をいただきました。ここに心からの謝意を表する次第であります。

平成8年9月

社団法人 スウェーデン社会研究所

目 次

はしがき

I. 交流事業の背景と目的	1
II. 地域・草の根交流の内容	
①クリスチャン宅	2
②ディセンター	2
③補助機具センター	3
④グループホーム1	4
⑤ハビリテーリングセンター	5
⑥サービスセンター	6
⑦ハーダー	6
⑧ムンクヘッテ基礎学校	7
⑨グループホーム2	8
⑩最新ディセンター	8
⑪FUB	9
現地での反響	10
III. 成果と意義：障害のある人の自立と社会参加のためのサポート	
1. 快適な生活をするための様々なプログラム	
(1) 障害のあるひとの1日の生活	12
(2) 医療と教育	13
(3) 住居	14
(4) 福祉の基盤として地方自治と社会サービス	15
2. まとめ	
(1) 交流を通じて考える障害者の快適な生活のための社会サポート	16
(2) 地域・草の根派遣視察の意義	17
(3) 地域・草の根交流欧州派遣事業助成に対する要望	17
視察日程表	18
IV. レポート：海老原昭朗／海老原宏美／	20
渡部照敬・真観	27
V. 視察メンバー一覧表・参考文献一覧	40
VI. 視察訪問団体概要	41
VII. 福祉に関する参考資料	46
視察訪問先関係者一覧	47

I. 交流事業の背景と目的

我が国においては、近年、国民の福祉政策の拡充にともない、知的・身体的に障害をもつ人や高齢者の方々の公立福祉施設の整備とあわせて、各地でグループホームやディケアサービス等の福祉サービス、ボランティア活動等が活発化しつつある。福祉施設の増加にともない、より優れた専門的で高度な施設が誕生し、コンピューターを導入した新しい機器、設備についての技術修得や、きめ細かいサービスへの対応等についても福祉に携わる人にとって重要な課題となり、最新技術・サービスの修得を含めた福祉に携わる人の養成と、福祉施設や福祉関連サービスの管理者等の人材の養成が強く求められている。その反面、我が国では、障害者・高齢者用の施設やきめ細かいサービスが経済的に成立しにくい環境にあることから、施設の拡充、サービスの充実、人材の養成等について必ずしも十分な対応が図られていない状況にある。

一方、スウェーデンでは、国や地方自治体によって福祉施設、サービス、人材の育成等が充実し、新しい福祉器具の開発が進められ、福祉活動が地域社会と結びつき、多くの雇用が創出されている。

これまでスウェーデンにおける福祉施設や公的福祉サービスが発展してきた背景には、障害者や高齢者を支える良き人材の養成と福祉器具の開発に力を注いできたことによることが大きいともいわれており、人材養成に当たっては、大学や各種学校等のアカデミックな教育と現場における研修制度、セミナーやワークショップなど業務段階に応じて様々な教育が行われ、福祉に携わる人が働きやすい環境が既に構築されつつある。このようにスウェーデンにおける福祉に携わる人の養成方法、福祉施設の整備を支援する各種制度の概要等については、今後、我が国の福祉の在り方を検討する上で、参考になるものと考えられる。

そこで本交流事業は、スウェーデンの社会サービス供給施設、障害者のデイセンター、グループホーム、障害をもつ人がいる家庭、養護学校、会社等を訪問し、福祉国家スウェーデンの現状を視察し、日本とスウェーデンの生活環境の違いについて意見交換を行う。その中で、障害をもっている当事者やその両親、介助者、福祉指導員がそれぞれの立場から見て、感じたことを報告書としてまとめた。

II. 地域・草の根交流の内容

9月1日(日)

①クリスチャンとの出会いと交流

21歳の青年クリスチャンとの出会いと交流は、とても貴重で楽しい時間であった。

クリスチャンについては、コーディネーターでクリスチャンの作業療法士でもある河本佳子さんから話を聞いて想像していた以上にジョークが好きでユーモアにあふれた明るい人であった。

日曜で公的な場を訪問できない私たちをクリスチャンの家族は自宅に招待してくれたのだった。

彼の家はマルメ市の中心から少し郊外にいった住宅地にあった。

クリスチャンは現在家族とは別に生活をしている。といっても家の一部改築した同じ棟続である。

クリスチャンは父親に家賃を支払い自立して生活している。もちろん自立した生活ができるのは、市から一定時間にわたって雇いを認められているアシスタントをつけることができるからである。彼には現在5人のアシスタントがいる。アシスタントは、来てくれる人と曜日や時間を相談して決めており、職場に行くときもついてきてもらい、自分でできないことを助けてもらうことになる。以前はアシスタントは6人いたが、一人だけ「働かないひとだった」のだそうでクリスチャンがくびにしたのだそうだ。このようにクリスチャンとアシスタントとの関係は、対等なつきあいのできる関係になっている。いかにもスウェーデンらしいエピソードであった。

最近福祉サービスの充実がはかられているが、マルメ市では財政的な理由により以前よりもいろいろとサービスについての規制が厳しくなっているようである。

例えば、アシスタントを雇う時間については、市が給料を支給するために前もって必要な報告書を提出するが、時間の削減をするために調査員がやってきたうえで、いろいろと話し合って雇用時間数が決まる。また、クリスチャンが使っている電動の車椅子は貸与されているものだが、タイヤを交換する場合にはタイヤは有料となる。

懇談の中で印象に残ったことは、福祉の一定のサービスは保障されているものの、やはり実際にいろいろな対応をしてもらうためには、クリスチャンの両親の行政の対する働きかけは大きな力となっているということである。そうした直接交渉による成果は非常に大きく、たとえば今回の家の改築の件にしても、70%は市から補助金が拠出されるそうだが、改築の許可がおりるまでに申請をしてから5年がたっている。このほかにも、彼が学校に入学する際の学校の設備や、リフトつきタクシーなどにしても根気よく、時にはエネルギーに交渉に当たる必要があることをクリスチャンの父親は強調していた。

また、福祉のサービスが充実し、設備が整えられたスウェーデンは、われわれにとっては憧れに近いものがあるが、クリスチャンの高校の卒業写真に対するコメントは、福祉サービスとは別の障害をもつひとの生活の違った断片を伝えているように思われた。彼が見せてくれた卒業写真は、マルメ市の新聞に載ったもので、以前に日本でも目にしたことのあるものである。人生の新たな門出である高校の卒業式に、彼1人は卒業生の輪からひとり離れて車椅子に座っている写真である。彼が言うには、「これが僕の存在のシンボル」だという。学友からひとり取り残されたひとりぼっちの光景は、障害をもつことによる孤独の深さを感じさせるものであった。

9月2日(月)

②Sördertorps Dagcenter

(知的障害者のためのデイセンター)

人口およそ24万人。スウェーデンでは第3番目

に大きな都市であるマルメ市には障害者のためのデイセンターが10ヵ所ある。そのうちのひとつのSördertorps Dagcenterを訪問した。

入口を入ると1人の青年が長い廊下に掃除機をかけていたが、彼もこのセンターへ通ってくるメンバーの1人だった。

このセンターの職員は26名(パートタイムを含む)。現在このデイセンターを利用している人は53人。ここを利用する人の住んでいる地域は特定されておらず、マルメ市全域から通ってくる。

市全体でのデイセンターの利用者は約460人いる。利用者は、各デイセンターの特徴に応じて、各自がどのデイセンターを利用するかを選ぶことができる。例えば絵を描くことを活動の中心としたデイセンターや図書館のカフェで働いたり、演劇を専門とするグループのいるデイセンターなど、さまざまな選択肢が幅広く準備されている。

Sördertorps Dagcenterの場合、6つのグループにわかれて活動がおこなわれている。封筒をデザインして色づけして作るグループ、テーブルクロスやカーテンをつくり、機織をする手芸グループ、ミュージックグループ、民間の会社から受注してきた品物を封詰めし、パッキングするグループ、木工グループ、洗濯、掃除、花の水やりなどを行うサービスをするグループとコミュニケーションのグループがある。

活動がおこなわれている各グループの部屋を案内してもらった。他にはコンピューター室や食堂、教科学習を行う部屋などがあり、教科学習室では、コンピューターを使ったプログラム学習や他の教材を見せてもらい、実際に体験してもらった。

利用者が、デイセンターのどのグループに適しているかは本人が決めることができる。1年間ずっと同じ仕事をする人もおり、1ヵ月ごとにさま



さまざまなグループの活動を試している人もいます。また、作業のすすめ方だが、封筒づくりを見た場合を例にあげると、1人で作業についている人や、何人かで集まってグループが同じテーブルについて仕事をしている人がおり、それぞれ各自の状態にあわせた仕事が行えるようになっている。仕事にノルマはなく、日本の障害者が働く現場にありがちな「強制」はここでは全くない。

私の職場である遠山真学塾では、知的ハンディをもつ子どもたちと一緒に勉強している。塾に来る生徒のなかには、作業所に通いながら休みの日を使って勉強をしている若者たちがいるが、かれらには働く場所での学習の機会が全く保障されていない。私の住む武蔵野市の場合、公立の作業所は一箇所だけであり、地域の企業による障害者の雇用の機会は整えられているとはいえない。障害をもつ人が、「選択する」「仲間と出会う」「決める」「働く」「学ぶ」といった人間として当然の活動を、障害をもっているとしても保障されるように日本も環境が整備へ動き出す時期にあるとおもわれる。

③Hjälpmiddelscentralen (補助器具センター)

補助器具センターは、ルンド大学附属マルメ市市民病院 (Universitetessjukhuset MAS) の敷地内にあり、大変利用しやすいようになっている。

このセンターでは、食事のさいに使用する器や食器、時計のような小さなものからテーブルやベット、システムキッチンといった大型の家具にいたるまでさまざまな補助器具が展示され、利用者に貸し出されている。

また、貸し出す際には車椅子、ベットなど使用する人の障害にあうように体や機能にあわせた形に修正されてから貸し出される補助器具が多く、細かな点まで本人の使いやすさに重点が置かれている。

そして、ここで展示されている補助器具にはバスタブも含まれているが、スウェーデンの場合、バスタブが日本と違い規格が一定である。規格が一定では面白みがないように感じられるが、これは非常に機能的である。入浴のさいに補助器具の使用が必要な人にとっては、どのバスタブにも補助器具があわせられてサイズについて面倒な心配

の必要がない。

また、ここで展示されていた補助器具は非常にユニークなものがいくつも展示されていた。例えば、自動的に体を水圧によって上下に動かすことができるバスタブや、筋肉や関節に障害のある人達のために、リモコンスイッチにより便座が移動し、「座る」「立ち上がる」という動作を介助なしでできるトイレなどであり、これらは最新の補助器具である。こうしたバス、トイレ、キッチンといった補助器具すべてのものについていえることは、これらは、決して障害を持った人に限らず誰にでも使いやすい器具であるということである。

また、こうした補助器具の貸し出しは必要に応じて行われ、子どもの場合はもちろん成長にあわせて交換が可能であり、制約はない。基本的に必要なときに誰でも必要な人が補助器具を利用することができるようになっている。

不要となって戻ってきた器具は、部品が各々に分解された後、専用の洗濯機で消毒と洗浄され、また再利用できるようにされる。

そして、障害にあわせてどういった補助器具が適切かなどのアドバイスもあり、問題の解決が必要な際には、病院や学校といった障害者の生活と結び付いた機関との情報ネットワークによって、最も適切なアドバイスや解決策がとられるようになっている。

日本では現在高齢化がすすみ、老人の介護の問題が問われている。在宅介護による家族負担もあるいは、老人が病院に入ったとたんに、介護のためにおむつの生活を余儀なくされて寝たきりになるこうした現状は、さまざまな補助器具を使用することによりずっと楽になり改善されることが用意に予想できる。また、トイレについていえば、楽に使える機能があることによって、障害のある人だけでなく、老人、妊婦、あるいは膝や腰を痛めたりしている人など、多くの人が容易に利用することができる。

このセンターでは、車椅子だけでも200種類が用意されており、年間1,500台ほどが貸し出されている。市からの援助により利用者は無料で借りることができる。

日本でもさまざまな器具が開発されてはいるが、

利用者の負担が大きいため欲しくても手に入れない場合がある。そして、こうした例は少なくないのが日本の現状である。

体が不自由である人達を助け、介護する人達に十分なお金を支払うことが必要であるが、そのままにせず、当事者が使える能力、機能を最大限に活かせるように援助するシステムが最も重要であり、今後こうした点は注目されなければならない。

④Groppbostad (グループホーム) 1

私たちが訪問したグループホームは、3年前にできたばかりの新しいグループホームである。それぞれのグループホームには、特に名称はついていない。

私たちを迎えてくれたのは、とても背が高く、長い髪に眼鏡をかけて、ちょっと神経質そうな瞳のロッタという女性。背の低いほうではない私も思わずみあげてしまった。彼女自身が自分の住んでいる家であるグループホームを案内してくれた。

ロッタの住む家は、グループホームのなかでも独立タイプと呼ばれるもので、通常私たちがグループホームと呼んでいるものとは少し異なっている。1階部分にコンタクトパーソンと呼ばれる職員が住んでいるが、玄関も全く別である。ロッタの住む部屋は、階段を上がった2階にあり、1人暮らしのアパートのようになっている。玄関を入ると広い居間があり、ソファとテーブルが置かれゆったりとした雰囲気である。居間の左側にはベットルームとキッチンがある。そして、居間の手前には広いバスルームがついている。日本の感覚から考えると大変に広い家だが、スウェーデンではごく自然な広さのようである。

このあとで見た1階のグループホームも同様だが、いたってシンプルな生活スタイルではあるが、カーテンの柄などは自分の好みで選ぶことができる。室内の飾り付けも余計なものは置いてはいないが、住人の個性や普段の生活、趣味が反映されている。

家賃として4,600クローナ/月(7-8万円)と2,000クローナ/月(約34,000円)を障害者各自がもらっている障害者年金と住宅補助金から支払っている。

1階の部分にあたるグループホームには5人が

住めるようになっている。ロッタの部屋と同様に、各自にキッチンとバスルームのついた個室があり、共有部分としてかなり広い居間とキッチンがついている。職員は11名。職員はコンタクトパーソンと呼ばれ、仕事はローテーションを組み、交替で泊る。

独立型の部屋にいるロッタは、このグループホームに移ってくる3年前までは、両親の家に住んでそこから職場に通勤していた。スウェーデンでは、18歳をすぎると親から独立して1人暮らしをはじめるのが一般的であり、障害があるということも理由に独立し自立した生活をおくることが阻まれることはなく、必要な援助を与えることによって、本人の自立した生活を尊重するという考えの下にグループホームのシステムが確立されている。

日本においては、障害をもった子どもの両親の一番の心配は「親が死亡した後の問題」というものである。就労の保障だけでなく、生活の基盤となる「住」の部分が保障されていることに福祉社会としてのスウェーデンをかいま見る気がする。

9月3日(火)

⑤Barn-och ungdomshabiliteringen

(児童と青少年のハビリテーリングセンター)

ハビリテーリングは、障害をもっている各人の機能や能力をいかせるようさまざまな学習プログラムや運動の訓練とそのサポートをおこなうものである。

リハビリの「RE(再び、もう一度)」という機能回復ではなく、現在の障害による各人の状況を重視し、各人の障害に対応した生活のサポートをおこなっていくことがハビリテーリングの役割である。

具体的には、①ADL(日常生活動作)②住宅③余暇活動④学校・仕事、に関するサポートを行う。

ここマルメ市の場合、ハビリテーリングに関しては市全体が4つの地区に分けられており、私たちが訪問した大学付属病院(MAS)の敷地なかにある“Barn & Ungdoms Habiliteringen”は、障害をもっている幼児から若者までを対象としており、約600人が現在利用している(コンピューターに登録されている人数)。年齢は0~20歳ま

でが対象である。各地区の診療所や乳幼児保育センターや同じ敷地にある大学付属の総合病院の小児科で、なんらかの障害が認められた場合、あるいは産婦人科の検診や出産の際に異常が認められた場合には直ちにこのハビリテーリングセンターに連絡が入るようになっている。

ここの職員は65名。今回の視察で大変にお世話になった河本佳子さんは、ここの作業療法士である。ここでは、医者、看護婦、作業療法士、理学療法士、言語療法士、医療ソーシャルワーカーといった専門家がチームをつくって対応している。なかでもとくに驚かされることは、「裁縫士」という専門の担当があったことである。裁縫士は、各自の身体にあったクッションなどをつくるための作業を専門にしている。日本においては、床擦れ防止用のクッションを子どものからだのサイズにあわせて作る場合などの作業は、母親の役目となりがちであり、専門家からアドバイスを受けられたとしても具体的な生活上の問題は各家庭の負担というかたちで任されているのが現状である。

このように医療チームの一環として裁縫を専門に行う人が公的な機関で働き、きめの細かいサービスがおこなわれていることは予想以上であった。

このセンターのなかを河本さんに案内して頂いた。地下1階から3階までのハビリテーリングに関してあらゆる機能がそろえられているセンターであった。

また、このセンター内は病院といった雰囲気はまるでなく、受付、廊下や階段や壁、各部屋のひとつひとつに子どもが飽きないように仕掛けや工夫がされている。

とくに印象的だったのは玄関わきの階段の壁面には、地下から3階まで兎の楽しい絵が描かれている。それらは、各階の高さにあわせ、地階は穴

を掘るうさぎが、上の階にいくと青空が広がっている。子どもたちが通ってくる際に楽しめるように配慮がされている。

そのほかに体育館、プール、陶芸教室、演劇室などもあり、こうした設備は主に機能訓練に使われている。例えば、陶芸や木工を楽しみながら手の機能訓練にも活かせるというものである。

20年間スウェーデンに住む河本さんは、スウェーデンのこうした制度を「人間が生きる価値を大切にすシステム」と表現され、非常に印象深かった。

スウェーデンのこの考え方を適応させていこうとする姿勢をハビリテーリングの現場を通じて感じ取ることができた。

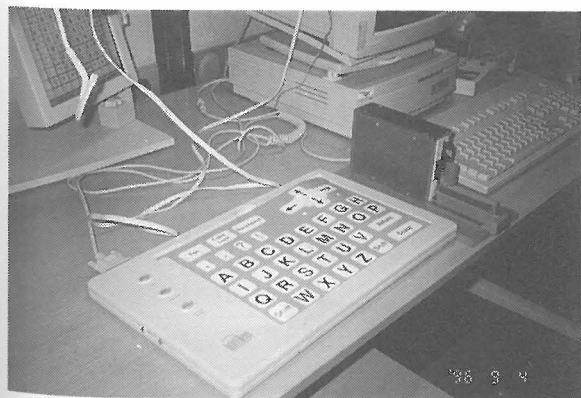
9月4日(水)

⑦Nya Parkmollan (サービスセンター)

グループホームで会ったロットが働いているトレーニングセンターの隣にあるサービスセンターを訪問する。このセンターの名前の由来は、すぐ前にある公園に因んでつけられている。パルコメーラン Parkmollan (公園で会うの意味) という。職員で主任のヨーランさんとエバさんが出迎えてくれて、説明をしてくれた。

このサービスセンターは、今年4月に改装オープンしたばかりである。1階の部分には障害をもった人や高齢者の人が使いやすいように会議室や相談室があり、センターの一部は福祉関係の新しい製品などを企業の展示場として利用できるようになっている。また、補助器具の展示コーナーがあり、レストランもついでいて、障害のある人もはたらいっている。2階より上の階は、住居になっていて老人や障害者が住んでいる。

このサービスハウスの特徴は、コンピュータもロビーに置いてあって、来所した人はそれを自由に使い、情報を得ることができる。このコンピュータには医療や福祉のサービスについての様々な情報が集められており、情報サービスセンターとして利用できるようになっている。ここの事務所にあるパソコンはインターネットを利用して、血液の在庫や薬などの情報を調べることが可能である。一日に30~50の方がここを訪れ利用している。レストランの方もたくさんの方が利用して



おり、アレルギーの人にも対応した食事を提供している。

ここは2年前まで年金生活者のサービスハウスであったが、今回の改装でコミュニケーションが障害者の人にも利用できるサービスハウスに作りかえた。会議室はハンディキャップのある人々には無料で使用できるようになっており、その他の人の場合は有料である。

そして、このセンターのトイレは最新式で、3タイプの違ったものがとりつけられている。自分の必要に合わせてトイレを選択できる。ひとつは、立ったままできる便器となっていて、人工肛門を洗うことができる装置がついているトイレ、座席の低い便器のトイレ、オムツをつけている人のためのトイレがあり、前後からお湯がで、熱風で乾かせるようになっている。また、どの洗面台も電動で上下する。展示室の一角にはベッドは電動で4段階に上下するもので、その上に敷かれたマットは心地よい堅さがあり、床擦れの防止の作用もあるものがおかれていた。

そのほか、目の不自由な人も楽しめる卓球のようなものや4つ玉のビリヤードが置いてあり、楽しめるようになっている。補助器具をその場で購入ことができ、ツエ立て（109クローナ）などの補助器具製品はユニークな発想のものである。

⑦ H A D A R (Handikapp Datorer Arbete Rehabilitering) (ハーダー)

9年前の1987年に設立されたハーダーは、設立当初は、視覚障害をもった人を対象としたコンピューターをつかった教育プログラムの開発と、視覚障害をもつひとのコンピューターによる職業選択の拡充を考えることから始まった。それは創設者自身が視覚障害をもっていたためで、同じ障害をもつ人達の職業教育を目的とするものであった。現在では、視覚障害のある人だけではなく、いろいろな障害をもつ人に対しても就労の機会が得られるように、職業訓練や教育がコンピューターを使って行われている。

ハーダーで開発され使われているコンピューターは、障害をもつ人が使いやすいようにさまざまな工夫がされていて、非常に興味深い。マウスの操作やクリックが足でできるものや、障害にあわせ

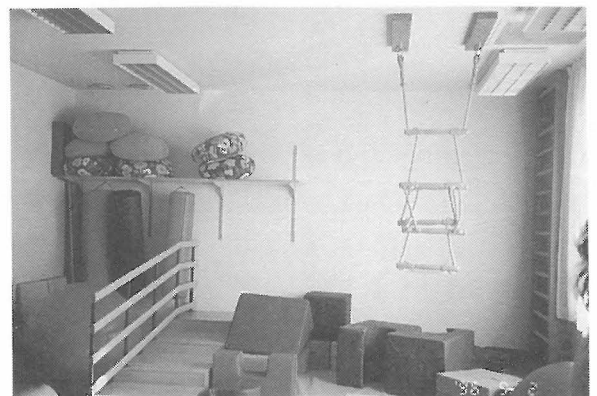
たキーボード、体をほとんど動かさない場合でも息や舌で作動できるものや、音声による入力と確認ができるものなど、さまざまな障害をもつ人がコンピューターを使いやすいように考案されていた。

次にハーダーの教育のプログラムであるが、通常は1クラスに6-12人がおり、45週間にわたるカリキュラムが用意されている。

その際カリキュラムは、それぞれ各自の能力にあわせてペース配分され進む。そのため、同じ教室にいても各自の目標や進度は違っている。そのため、全員が一斉に同じ内容について学習していくやりかたにはならない。

また、学習者によってはクラスを変えたりすることもあり、当人が学習しやすい方法を選択し、フレキシブルな対応によって教育が行われている。そのため45週間の目標は、本人と担当者、専門家などの話し合いによって行われる。コンピューターの使い方をマスターしたい人、実際に仕事として使いこなせるようになりたい人というように、各自のレベルにあわせた目標が設定される。

実際にどのように学習を進めていくかいくつかの説明が教育担当のピア氏からコンピューターの画面を使ってあった。普通の人でも、さまざまな機能を備えたコンピューターの使い方をすべて把握するまでは大変な時間が必要である。ハーダーが開発している教育プログラムは、機能に障害をもつ人や、知的な障害があることによって社会適応が難しい人にコンピューターを理解し、使えるようになってもらうためのものである。例えば、勘違いを起こしやすいところをなくすために、コンピューターを実際に分解した部分を用いたりすることによって、その構造を理解してもらう。あるいは、フロッピーディスクの中を分解して見せ



て説明を行うといものである。こうした学習方法をとることによって、コンピューターに対する基本的な勘違いなくし、その機能について具体的に理解してもらうことができる。私は日頃知的にハンディのある子どもたちとの学習で、抽象的な概念を教えているとき度々苦勞することがある。具体的な構造を把握することは、知的に障害がある子どもたちにとって最も早く有効に抽象的な概念を理解するための手段といえるだろう。

また、次の段階では画面の簡素化を行い、余分な言葉や記号を外して、たとえば「イエス」と「ノー」だけで、画面には最小限度の機能しかうつさないようにしてプログラムが進んでいく。そして、段階をおって複雑なコンピューターの機能を少しずつ理解できるように工夫されており、コンピューターに詳しくない私にも非常に分かりやすくてきていた。また、コンピューターを使った職業訓練のためのプログラムも用意されていた。たとえばレジで働く人が、お金をもらってお釣りをあげるといった練習がコンピューターの画面でできるようになっている。この他にも職場で働いている場合のさまざまなシュミレーションができるようになっているプログラムがつけられたり、開発されたりしているとのことである。

9月5日(木)

⑧Munkhätteskolan (ムンクヘッテ基礎学校)

私たちが学校についたときはちょうど休み時間だったようで、校庭の脇の道から車椅子を使っている子どもがほかの子どもにまじって一緒にボールで遊んでいる光景を眼にすることができた。日本の学校ではあまり見慣れない場面であり、なぜかほっとするものを感じた。

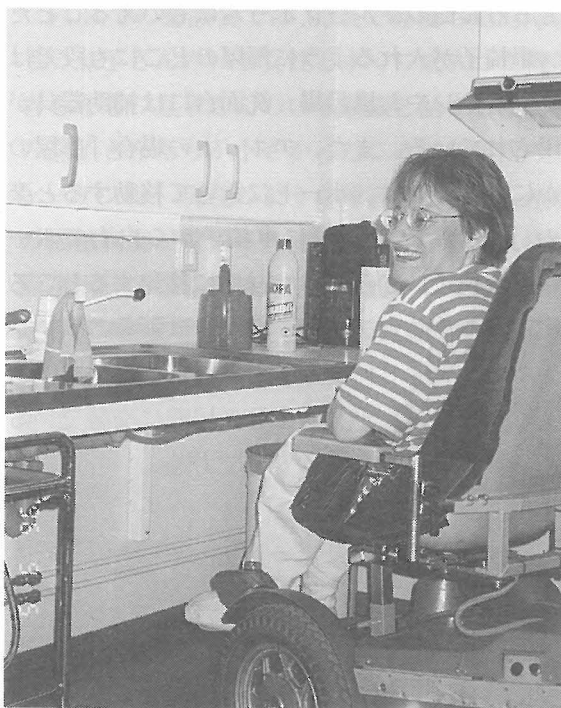
ここムンクヘッテ基礎学校は、日本でいう小・中学校にあたり、全校生徒は350人。そのうち肢体不自由児は35人通学しているが、このなかには知的障害をもつ重複障害をもつ子どもも含まれている。障害をもつ子どもたちは、普通クラスに統合されて授業をうけている場合と特別クラスで個別の授業が行われる場合がある。特別クラスは現在は全部で4つあり、低学年(1-3年)に1クラス、中学年(4-6年)に1クラス、高学年(7-9年)に2クラスとなっている。障害をもつ生

徒のために、I.S.P. (Individual Service Program) が組まれている。

1人の生徒に対して、教師、パーソナルアシスタント、作業療法士、理学療法士、言語療法士、心理士、医者などがチームを組み、話し合いを行い問題の解決にあたる。もちろん生徒本人と家族もこれに参加する。ここにあげたチームは、実はハビリテーリングでの医療チームが派遣されているものである。学校と医療とがネットワークによって結び付いており、生活全般における問題に対処していくことができるようになっている。子どもたちの場合、生活の中心は学校生活であり、チームのメンバーに教師が加わったサポートシステムを形成している。

今回はビデオによって子どもたちの様子をみせてもらったが、画面だけでは分かりにくいところもあり、直接授業風景に参加できず残念だった。

また、この学校では言語に障害をもつ子どもたちのために、「ブリス」(BLISS)というコミュニケーションプログラムを積極的にとりいれて授業を行っていた。ブリスは、言葉を絵記号にかえて表現し、その組み合わせによって自分の意思や気持ちを表現できるようになっているもので、1枚のボードにこれらが印刷されている。これを使って、「私・食べたい・りんご」のように順に言葉(絵記号)をさしていくことによって、「私はりんごを食べたい」を相手に伝えることができる。



スウェーデンの多くの特殊教育の現場で最近使われているようだが、この学校では週に1回授業が行われている。また、ブリスの他にも学校の中にはピクトグラムと呼ばれるわかりやすい絵によって表現された印が各教室のドアにはられている。これらの印は、そこがどういった場所であるかを一目で理解できるようになっている。

この他、この学校では補助器具や教材も多くそろっており、障害児と健常児の場の統合と機能的統合を果たした学校のひとつにあげられるだろう。こうしたインテグレーションが確立していることは、この学校を希望して通学してきている生徒が多いことから十分に理解できる。

⑨Groppbostad (グループホーム) 2

当初の予定はなかったが、3日目に訪問したグループホームの所長さんの好意によって、私たちはアネットさんの住むマルメ市の郊外にあるグループホームを紹介して頂いた。

このグループホームも閑静な住宅地のなかにあった。私たちに会ってくれたアネットさんは30歳になる女性で、普段は車椅子を使っており、軽度の知的障害をもっている。ここのグループホームには、アネットを含めて5人が住んでいる。彼女の部屋もロッタと同様に広く、きれいにかたづけられ居心地のよい部屋で、テラスを出ると小さな庭もついている。

もちろん他のグループホームにもいえることだが、車椅子が入れるように部屋のどこにも段差はなく、トイレやお風呂場、洗面台には補助器具が使用されている。また、アネットの場合「部屋のなかにいるときは、ボードに乗って移動すると楽なの。」と言って、実際に車椅子から自力でボードに乗り換え、さらにはベットに移動するところも実演してくれた。また、部屋には緊急のベルがついており、もし何かあった場合には職員(コンタクトパーソン)が共通部分の居間に交替でいるため、いざというときも安心である。

アネットの場合も1ヵ月に4,000クローナ(約6万8000円)を家賃として支払っている。また、以前はデイセンターに通っていたが、現在は“MOOMS”というデイセンターが母体となった劇団のメンバーとして活躍しており、将来は海外

公演の予定も考えているようである。 私たちを迎えて自分の部屋に案内してくれた彼女は、きれいにお化粧し、終始笑顔で陽気に話してくれた。近々公演があるとのことだったが、是非一度彼女の演じているところを見たいものと思った。

9月6日(金)

⑩SAFIREN

(サファイレン：最新デイセンター)

マルメ市の街の中心部から少しはなれた海の近くの住宅街にSafirenはあった。ここもデイセンターのひとつで、今年の8月6日にオープンしたばかりである。2階建ての建物は真新しく、こちよ音楽が流れ、4日前に訪れたSödertorps Dagcenterとはまた別の雰囲気を出している。

このセンターは、主に知的障害をもつ人を対象としたもので、通常デイセンターは21歳から65歳までの人が対象であるが、ここでは現在25歳から35歳までの21人が利用している。そのうちの3人は軽度の知的障害をもっている人で、他の人は重度の障害をもった人である。

職員は全部で9人。生活指導員、理学療法士、言語療法士、また日本では聞き慣れないが活動指導士(Activected Teacher)といった職種に分かれている。各自のパーソナルアシスタントと一緒にやってくる人もいる。実際の活動では、重度の障害をもっている人がここでは多いため、日常生活のための訓練的な要素が強いようである。また、訓練といっても無理やり何かをさせるのではなく、五感を刺激して自分から何かをするという意識がもてるように、様々な取り組みがされている。たとえば、ここでは4つのグループに分かれて活動が行われているが、各々は「バニラ」、「ラベンダー」といったにおいの名前がつけられている。そしてこのにおいは自分のグループの入り口にこのにおい袋がおかれていて、においの刺激によって自分部屋の前にいることがわかるようになっている。とくに重度の障害をもったひとにとっては、視覚だけで判断することは難しいため、こうした工夫がされている。

あるいは、「コーヒーがある。」というだけでは認識が難しい場合、カップをもつ、匂いをかぐ、なめてみる、といった感覚によって覚えていくこ



とを重視している。そのために、各部屋のドアにはピクトグラムによる絵印だけでなく、その部屋を象徴するものがかけられているのは大変にユニークで印象的であった。(たとえばトイレだとトイレトペーパー)

このデイセンターの2階部分には、様々な知覚感覚室があり、各々の部屋、知覚や感覚を刺激したり、穏やかにしてリラックスさせたりするように作られている。ここでわたしたちは、実際に自分たち自身で非常に楽しい体験をすることになった。

ここでは、障害をもっている人に安心感を与えるために、毎回同じ職員がついて同じ活動を行うようにしている。

また是非訪ねてみたい不思議な空間といえるデイセンターだった。

① FUB (全国知的障害者協会)

FUBは、1956年にスウェーデンの全国的な組織として結成された。当初親の会として活動を始めたが、1970年代のノーマライゼーションの動きのなかで、障害をもつ人の社会参加と自己決定に重点をおいて活動を行っている団体である。

FUBのマルメ支部は、大きなスーパーマーケットや商店が入ったショッピングセンターの1階の一角に事務所があり、非常に日常的な場所に立地しており周りとの違和感は全く感じられない。

事務所には買い物に来たとき寄ることができるようにFUBの組織のPR用のポスターがドアや壁に何枚か貼ってあり、障害をもった人自身が障害者の人権擁護を主張するモデルとして写っている。自らの障害を認識し、自分たちのことは自分たちで決定していくというFUBの姿勢がこのポスターからもうかがえた。また、ここの地下には余暇活動を行うための余暇センターが用意されている。利用者の年齢制限はないが、ここにはクラブ活動が行われる水曜と木曜日になると、15歳から20歳までの若者たちが主に通ってくる。クラブは木工や音楽・陶芸・絵画など様々な活動が行われている。また小さな子どもたちのためのプレイルームもある。

子どもたちがこの余暇センターに来ている間は、親は自由時間を持つことができ、子どもだけでなく親にとっても貴重な時間である。障害をもった子どもの余暇を過ごす場所が確保し、保証されることは、日本では、通学する学校が自宅から離れていたりして近所に友達ができにくいために非常に難しい問題となっている。学校や家と違った場所で新しい仲間と活動できる機会がもてることは、こどもの世界をずっと広げることになる。センターでは、子どもたちがつくった楽しくカラフルな作品を見ることが出来る。こうした余暇センターでのクラブ活動の他に、障害をもった子どもたちだけでキャンプに行くプログラムがある。

FUBでの懇談会では、35歳で軽度の知的障害をもつ息子さんのいる女性とすでに成人した機能障害をもつ息子さんのいる家族と話をした。彼らの息子さんたちが小さかったころ1960年代のスウェーデンは、現在のような障害をもった人のための福祉制度が整備されておらず、学校に入学する際選択肢はなく、特殊学校に通学しなければなら





なかった。私たちが訪問した先々で「スウェーデンはすごい」という印象が強いが、30年前にはまだ現在のような制度やサービスはなかったのであり、障害をもった人の各自の発言や行動、あるいはFUBのような団体の活動が現在のスウェーデンの社会を作り上げるのに大きな影響を与えているのだと感じた。

(2) 現地での反響

視察訪問先で大変に歓迎され、親切にして頂き、充実した視察を実施することができた。

具体的に説明をすると、まず最初の訪問先であるクリスチャン家では、午後の遅い食事を準備をして待っていてくださった。スウェーデンでは特別な時にしか作らないという大きなサンドイッチであるスモルゴストルタをクリスチャンの父親がつくり、母親が手製のケーキを用意して歓迎してもらい、リラックスした雰囲気の中で懇談することができた。また、プライベートな部分も含め、改築した家の全室を気軽に見せてもらうことができた。

知的障害のためのデイセンター（Södertorps Dagcenter）では、デイセンターの所長のマイ・ノルド（Maj Nord）さんや職員の方々に歓迎され、所長のマイさんは忙しいなかを自ら各作業部門を案内し、説明して下さった。封筒作りの作業場では、実際の細かい手順を実演して頂き、センターでの活動が具体的に分かるように配慮してもらった。

補助器具センター（Hjälpmiddelscentralen）では、担当のアンナ・モンソン（Anna Mansson）さんにセンターの案内と説明をしてもらった。また、視察メンバーの海老原宏美さんに様々なタイプの電動車椅子試乗の機会を頂き、その機能を実

地に体験してもらうことができた。とくにご好意で屋外に電動車椅子を出してみんなと一緒に、電動車椅子に試乗しながら散歩を楽しんだ。また、補助器具に詳しい作業療法士の河本佳子さんに通訳をして頂いた。

ロッタ（Lotta）さんのいたグループホーム（Gruppbostad）では、デイセンターの教師をしているリル（Lill Nyberg）さんとコンタクトパーソン（kontaktperson）のかたからお話しをうかがい、各自の住まいを見せて頂いた。その際、海老原宏美さんと同様の障害をもった人がいるので紹介したいと、他のグループホームに連絡をして頂き、スケジュールの予約まで入れてくださり、大変に好意的であった。

ハビリテーリングセンター（Barn-och ungdomshabiliteringen）では、総院長のマルガリータ・ニルソン（Margareta Nilsson）さんには、大変に忙しいためご挨拶だけをさせて頂き、作業療法士として勤務されている河本佳子さんが地下1階から3階まで、ハビリテーリングのあらゆる場所を案内して下さった。まだ全部は完成していない真新しい知覚感覚室も拝見したり、障害をもちながらも車の運転ができるようになっている自動車で通勤している方にも合わせてもらった。

サービスセンター（Nya Parkmollan）では、情報担当のヨーラン・スベンソン（Goran Svensson）さんとエバ（Eva）さんに新しくできたばかりのセンターの説明と案内を快くしてもらった。

ハーダー（Hadar）では、最新のコンピューター機械と技術についてビクトール・フェルミシェーク（Victor Fermischek）氏から実際にコンピューターを動かしながら説明があり、ハーダーの活動およびハーダーの教育プログラムについて各専門の職員から別室で、現在使っているプログラムを実演しながら説明をうけた。また、職員とこの生徒で日本に住んだ経験のある人を紹介してくれた。

ムンクヘッテ基礎学校（Munkhatteskolan）では、医療チームのリーダーで作業療法士であるリーサ・ハーデンシュテット（Lisa Hardenstedt）さんとアシスタントの方が、最初ビデオを使いながら説明し、詳しい内部資料を見せてくださり、

その後、学校の教室を実際に見学させてもらった。また、帰りには言語障害をもつ子どもたちの使っている教材のブリス (BLISS) をお土産に頂いた。

最初に訪問したグループホームで紹介されたもう一つのグループホームは、アネット (Anett Jonsson) さんという人の住んでいるところで、リルさんが案内してくださった。ここでも大変に歓迎をうけ、楽しくいろいろなお話をアネットさんの住まいを拝見しながらお聞きした。

最新の知的障害デイセンターであるサフィレン (SAFIREN) でも、所長のスザンヌ・ノードストロム (Susanne Rosenstrom) さんが出迎えてくれ、このセンターの組織や活動について説明があり、その後で知覚・感覚室に案内され、全体の設備と機能について説明をもらった。

最後の訪問先のFUBでも、余暇センターを無

料で見学させて頂き、アンヌ・ソフィー

(Ann-Sofi) さんたちにケーキとお茶で家庭的な雰囲気の中かで歓迎して頂いた。

視察中、現地の新聞であるアルベテット (ARBETET), シード・スベンスカ (SYD SVENSKA), スコンスカ・ダーグブラーデット (SKANSKA DAGBLADET) から視察についての問い合わせがあった。

さらに、今回移動の際にリフトつきタクシーを多用したが、利用したタクシー会社 (TAXI90) の方が大変親切で、最後は数回サービスで移動してくれた。このリフトつきタクシーの制度は気軽に利用できるもので、車椅子での移動には非常に楽だったと思う。

Ⅲ. 成果と意義

障害のある人の自立の社会参加のためのサポート

1. 快適な生活をするためのサポートプログラム

今回の地域・草の根交流視察の成果を分かりやすくするために障害をもつ人がどのような生活をするかを中心に以下のような形でまとめた。

(1) スウェーデン人の障害をもつ人の一日

スウェーデンの成人で障害をもった人たちは、一日の生活において様々なサービスやサポートを受けている。例えば障害をもっているために1人で身仕度をしたりがすることが困難な状況にあっても、親からの自立した生活をしているのでグループホームなどの施設に入っている。

まず朝は、施設の職員が朝の身仕度の世話をするほか、朝食を作り一緒に食事をする。また施設に入らず自宅に住んでいる人でもパーソナルアシスタントを雇うことができ、手助けが必要になった際に援助してもらうことも可能である。また、親と住んでいる人は、親と一緒に食事を取るが、決して親にだけ頼っているのではない。

障害をもつ人は、自宅を生活し易い環境にするために、改造するときはコミューンから補助金が

支給される。また、最新の補助器具を補助器具センターから無料で借りることができる。さまざまな補助器具によって、障害をもった人でも、身の回りのことを一人で行えるように生活環境を整備することができる。

朝の身仕度も終わって仕事場に向かう時の移動方法は、コミューンが契約しているタクシーを利用する人が多い。障害者ならびに高齢者はこのタクシーの定期券を安く買い求めることができるようになっている。このシステムによって、障害者や高齢者であっても、気軽に外出することができる。また、タクシーのほかに障害者が移動する手段として、特別循環バス (9人乗りぐらいの小型車) も走っており、こちらを利用することも可能である。この小型バスにはリフトが取り付けられていて車椅子でも容易に乗ることができる。

一般の人が利用するバスに乗る場合にも、タクシーと同様に定期券を安く購入することができる。そして、一般のバスにも座席中央に乳母車や車椅子用のスペースが設けられている。

このほか、マルメ市内を走るバスの多くは、天

然ガスを燃料とする「環境保全型」のバスになっている。電車にも車椅子を利用する人が乗車しやすいように、きめ細かい配慮がされている。その一例として、駅から段差を取り除くよう駅構内や駅周辺を整備したり、エレベーターを駅の中央部に設置するなど随所に工夫がみられる。また、バスや電車と同様に、スウェーデンでは自家用車にも工夫がなされていて、日常車椅子を使っている人でも自分で運転ができるように改造されている。

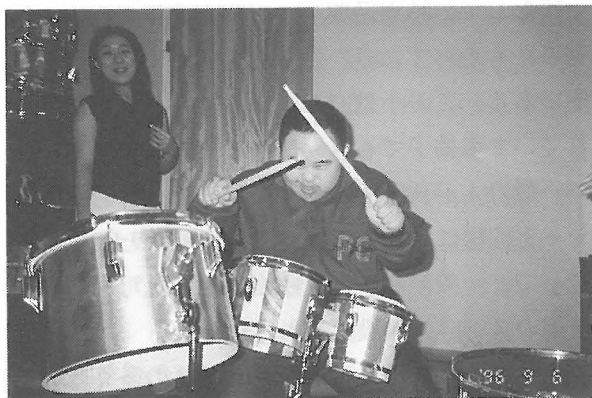
現在、重複障害や重度の障害をもつ人たちの多くがデイケアセンターに勤めている。デイセンターはそれぞれにセンター独自の特色（芸術中心など）ある活動が行なわれており、障害をもった人自身が勤めたいと思うセンターを選ぶことができるようになっている。

また、サムハルという半民半官の事業グループがスウェーデン全土にあり、「障害をもつ人が働きやすい職場」作りを目指して職場環境の改善、補助器具の開発・研究を行っている現在。サムハルは22の事業体から構成されており、それぞれの事業所では、花やパッキング、コンピューター、宅配サービス等の業務を行っている。このほかに障害をもつ人たちが働く場所として公立の図書館や郵便局にある喫茶店などがあり、ここでは障害者を優先的に雇用している。

また、一般企業においては、障害者の雇用義務が定められており、障害者雇用率は、ほぼ達成されている。

いったん就職して働きはじめてからでも、職場での生涯教育や機能訓練の機会が与えられており、たとえ障害者であってもキャリアアップが可能のように技術開発コースなどがコミュニケーションによって多数用意されている。

障害をもった人たちは、昼食を通常職場で取る



ことになる。デイセンターで昼食をとる人の昼食代は、1カ月400クローネ（1クローネ＝約17円；約6,800円）であり、安く食事をするができるようになっている。また、デイセンター以外の職場で働いている人の場合は、職場の社員食堂を利用したり、サンドイッチなどの簡単な食事を自分で作ってくる人もいる。

働いていない人や自分で料理をしない人のためには、サービスハウス（コミュニオンが経営し、障害をもっている人や老人にサービスを供給する場所）がある。そこを利用する場合にもコミュニオンから補助金が支給されているので、安く昼食を取ることができるようになっている。

職場から住まいに戻ってくると、夕方の余暇の時間を利用して様々な活動を各自の生活にあわせて行なっている。例えば、リハビリによる生活訓練や療養のためのプログラムなどを用意したり、在宅看護を受けたり、または生涯学習としてコミュニオンが運営している学校（komvux）で勉強をしたり、趣味の陶芸や音楽といったコースをとることもできる。

FUB（障害をもつ親と子の会）の余暇センターや労働団体が主催するクラブ活動（音楽や陶芸、ディスコ、演劇クラブなど多数ある）に行くこともできる。各機関では様々な活動やプログラムが用意されている。社会教育施設である図書館には視覚障害や聴覚障害をもつ人のための新聞や図書が充実している。これらの余暇時間の使い方については余暇コンサルタントと呼ばれる専門家が親身になって相談にのっている。

(2) 医療と教育

スウェーデンでは、子供たちに何らかの障害が発見された場合には、直ちに専門家のところに連絡が届くよう情報ネットワークが整備されており、すぐに対応できるよう専門家集団によるチームワークが組まれている。このようなシステムが組めるようになった理由の1つに、パーソナルナンバー制度がある。このパーソナルナンバー制度は、生まれた地域、生年月日、性別によって国民全員に番号がつけられるもので、銀行で口座を開設する場合や、クレジットカードを使用する場合、病院などを利用する時に身分証明書として、このナ

ンバーの提示が義務づけられている。国民が病院などを利用した場合には、個人情報が即座に国の情報機関に登録され、管理される仕組みになっている。このパーソナルナンバーにより医療や財政など、国民の基本的な情報を国が管理することで、国民に何らかの障害が発生した場合には関係各所に必要な情報が送ることができるのである。

子どもが障害をもって生まれてきた場合に、機能訓練が必要であるという判断がなされると、その子どもは、療育のサービスを受けることができる施設「ハビリテーリング」(Habiliteling)に通うことになる。「ハビリテーリング」は0歳から20歳の子どもに対する医療的サポートをする専門家のチームが、個人別に構成され、子どもに多方面から援助を与えていく。

ハビリテーリングの医療チームは、作業療法士(日常の行動や作業を訓練として取り入れ機能回復の為にプログラムにもとづいて作業療法を行い、その人の障害に合わせた補助器具の使用や家屋改造の手助けをする)、理学療法士(特に医療や医学的な診断や知識をもとに理学療法を行う)、心理臨床士(カウンセリングや心理的な療法を担当)、医師、看護婦、社会福祉士、幼稚園コンサルタント、補助器具に対する裁縫士と技術士、余暇コンサルタント、言語療法士、パーソナルアシスタント、家族等で構成されている。

ハビリテーリングの医療チームは、学校にも配置され、補助器具や機能回復訓練がスムーズに行われるよう働きかけている。このように医療体制や情報ネットワークが整備されているため、結果的には、障害児の早期発見、早期療育が行われるようになり、また障害児の就学に際してもきめ細かい対応がなされるようになった。

現在スウェーデン人女性の85%が就労している。このため、保育園や幼稚園の利用率が高くなっている。そして、スウェーデンの保育園や幼稚園は、基本的に障害児と健常児との統合保育が行なわれている。また、障害をもった子どもの両親は、小学校(基礎学校)に入学してからは、子どもをフリーテッドヘムという学童保育(統合保育)に預けることができ、母親も安心して働くことができるようになっている。

スウェーデンの義務教育は7歳から16歳までの

9年間である。

障害をもつ人の教育機関は、特殊教育学校として、重複障害をもつ視覚障害児の学校が1校、公立聾学校が4校あり、聴覚障害と精神滞の重複障害児のための学校が1校、情緒障害と聴覚障害児のための学校が1校、全国にあるが、視覚障害や身体障害児のための学校は健常者が通う基礎学校に統合されている。

知的障害児が通う学校は、完全に通常学級と統合することが困難という認識から、通常の教育とは別体系になっている。このため、知的障害児には、日常生活における自立を目的とする重度の知的障害児のための訓練学校と、日常生活に必要な読み書きの修得を目的とする軽度の知的障害児のための養護学校がある。

障害をもつ生徒が学ぶ高等学校には、健常者と統合の学校がある、他に、一般の高等学校のように専門のコースに分かれている特殊高等学校がある。ここでは、障害をもつ人が親から自立するための勉強や訓練を行うために寄宿舎を備えているところもある。さらに社会に出てからもコミュニケーションが運営している学校(コンブクス: Komvux)や、義務教育が終了した後に教育の機会に恵まれなかった人や、勉強をやり直したいという人のための国民高等学校(フォルクフォークスコーラン: Folkhogskolan)がある。国民高等学校は「誰でもいつでも無料で」をキャッチフレーズに多様なニーズに応えられる教育機関となっている。

スウェーデンでは仕事をもっている健常者も障害者も、教育の機会は保障されており、現職を維持したまま、数週間の短期間の研修から、数年間という長期間の研修を受けることが可能である。

(3) 住居

スウェーデン人は成人すると親から自立して生活をする。障害をもつ人も20歳くらいになると自立の指導がハビリテーリングなどで行なわれ始める。

親からの自立を考えている人で、1人で生活することが困難な人には、グループホーム(グループボスタッド: Gruppbostad)という施設がある。1つのグループホームには障害をもつ人が平均55-6人住んでおり、グループホームの建物は、共

有部分と個人の部屋に分かれている。共有部分は大きな台所と居間になっており、グループホームの職員は、交代で常時2-3人が8時間(職員によって時間に長短がある)のローテーションで、24時間ケアの体制を組んでいる。共有部分は、居住者が寂しいときなどに、基本的には自分の部屋で生活している。

個人の部屋は、独立した広い1LDKや2LDKになっていて、家賃は4000クローナ前後(約68000円)である。障害をもつ人にはコミュニティから住宅の補助が出ているので、毎月供給されている障害者年金とあわせると自立して生活することができる。

グループホームは使わずに親と一緒に住んでも、障害をもつ親の都合が悪いときや、親が子育てから開放されて自分の時間が欲しいとき、または普段グループホームに入っている人が気分転換をしたいときには、ショートステイホーム(コートティッドヘム: Korttidhem)という施設がある。ここは予約制になっており、数時間から数日間滞在することができ、ショートステイホームの職員が障害者を預かる責任を持つもので、成人用と子ども用の2種類がある。施設利用料は基本的に無料で食事代だけを払うことになっている。

スウェーデンには独自の里親制度がある。それは子どもを短期間の里親としてあずかる制度で、週末だけといった短期間に、他の家庭に子どもが滞在するものである。親が子どもの面倒を見られない場合にこの制度を利用できる。利用者は、コミュニティの里親制度に登録している家庭のなかから、子どもにあった家庭を見つけて交渉をする。子どもを引き受けた家庭にはコミュニティから手当が出る。

子どもが両親の家に住んでいる場合もある。子どもが小さいときや独立したくないときには選択の1つとして両親と住むことも考えられる。

1人暮らしをする場合には、その人の障害によってコミュニティから住宅手当が出る。

(5) 福祉の基盤としての地方自治と社会サービス

スウェーデンには地方分権の基盤となるランスティンクと呼ばれる県が23、コミュニティと呼ばれる市町村が286、シルココミュニティと呼ばれる教会

を中心とした教区が2552存在する。県は医療活動のみを担当しており、県によってコミュニティが支配されることはない。そしてイエテボリ市やマルメ市のような大都市やゴートランドのような島ではコミュニティが県の仕事も兼務している。

公共部門の財政区分は、国と、コミュニティを意味する地方自治体、そして国からの業務移転の社会保険部門の3つになる。国の歳入の60%は付加価値税などの間接税で、歳出の60%は地方自治体や社会保険部門への移転支出になる。

地方自治体の歳入の60%以上は所得税などによる直接税で、歳出の75%は人件費などの消費支出である。また社会保険部門の歳入は社会保険料収入と補助金収入が大部分を占めていて歳出は、ほとんどが家計に対する移転支出になっている。

コミュニティの主たる仕事は教育(主として義務教育)、文化(公園、図書館等の整備と管理)、交通(道路網と地方交通網の整備と管理)、エネルギー(電力、地域暖房の安全供給)、社会サービス(社会福祉、児童福祉、老人福祉等)である。

前述したように県は医療、教区は以前は住民登録と埋葬の仕事をしてきたが、宗教の自由の尊重により現在は埋葬の仕事だけを担当する。生活に密着したサービスについてはコミュニティの役割が重要になっている。

国の政府の権限と地方自治体の政府の権限は、地方自治法と特定諸立法、受権法の3つの法律によって県やコミュニティにさまざまな社会的任務を委任している。

形式的には国会が立法権を持っていて、政府が命令を発布できることから、国がすべてのレベルの政府の活動に対する包括的な責任を持っていると一般的には考えられている。しかし実際には国の機関が直接に責任を引き受けて行政を執行しているのは公共部門の活動の1部にすぎず、様々な社会的任務は県、コミュニティに委任されている。またこの委任とは国がコミュニティを管理するのではなく、国の立法や命令によって侵害することのできない自治の領域が存在するという考え方に基づいており、自治権に対するこの考え方は19世紀の初頭以来根強く存在していたものである。公共的決定は、市民にできる限り近い政府でなされるべきだと考えられている。地方自治の権限は次の

ような範囲においてである。

第一に、その地方自治体の一般的利益に関するもの、第二に、活動が営利を目的としないもの、第三に、他の地方自治体あるいは国の機関の権限領域を侵害しないこと、第四に、活動の決定が合理的な理由に裏付けられるもの、第五に、決定にあたっては法律に規定された手続きを踏むこと、とされている。

社会サービスの主なものに社会保険の給付がある。

社会保険を広く平等に普及させることは、社会的な不平等を減らす重要な手段であると考えられてきたため単に困窮している人々というよりは、すべての所得階層、職業・社会集団の属する人々を対象にした包括的な福祉政策が立てられてきた。今日の社会保険制度には以下のものがありいずれも国民保険法 (Lag om allman forsakring) の適用を受ける。

健康保険には、a. 医療費手当 b. 疾病給付
c. 出産給付 d. 両親給付

年金には、e. 基礎年金 f. 国民付加年金
g. 部分年金

労災保険には、h. 労災保険

その他には、i. 児童手当など各種の給付がある。

これらのなかでも障害を持つ人に関するサービスは、aに含まれるリハビリのための外来診療や病院治療、医療補助員治療、交通費、調合薬、bに含まれる疾病給付、疾病給与、職能訓練手当、雇用補助の補助金は、dに含まれる子どもの臨時介護、eに含まれる障害年金、障害手当、児童介護手当、児童補助、fに含まれる障害年金、hに含まれる疾病給付、iに含まれる児童手当、児童手当補助訓練手当、特別成人教育援助などである。国民保険を担当しているのは各地域の社会保険事務所であり、各々の人の状況に応じて社会保険は給付される。

障害をもつ人の社会サービスを保障する法律として、障害をもつ人の援助とサービスに関する法律 (Lagen om stod och service till vissa funktionshindrade) が1994年から施行された。

この法律の対象者は、1) 病気等によって後天的に障害を持つことになった人、2) 身心障害を

もち日常生活に支障をきたす人、そして新しく、
3) 自閉症など知的障害を持つ人、である。

保障される内容は、以下のようになってい。

1. 専門的な援助や助言 (社会福祉士等のような専門的な知識をもつ人からのサポート)
2. パーソナルアシスタント (日常生活に必要な援助を供給する人をコミュニンがお金を払い雇う)
3. 付き添いサービス (外出時の付き添い)
4. コンタクトパーソン
5. 家庭での問題解決サービス
6. ショートステイサービス
7. 12歳以上の重度障害を持つ子どもの学童保育
8. 子どもの自分の家庭以外の居住環境 (特別なサービスのついたグループホームなど)
9. 大人のための特別なサービスのついた住居
10. 日常の活動 (職業訓練など)

2. まとめ

(1) 交流を通じて考える障害をもつ人の

快適な生活のための社会サポート

はじめに今回の交流の最後の訪問先のFUBの余暇センターでの交流のエピソードを取り上げたい。余暇センターの地下にある音楽室には、ここを利用する若者たちのためのさまざま楽器が置いてあり、そのなかにはドラムのセットがあった。FUBのメンバーのすすめでさっそく今回参加した渡辺真観君が演奏してみるようになった。彼はドラムの一つを自分の習っている太鼓に見立てて演奏を披露してくれた。間を取りながら「ヨーオッ」のかけ声とともに迫力ある演奏にあたりは一瞬静まりかえり、FUBのメンバーも演奏が終わった時には大きな拍手を真観くんを送っていた。

ここには、演奏の素晴らしさとともに、もう一つの意味があったように思える。真観くん自身が「演奏する」ことを決め、自分でやり遂げたということである。

一般的にみても「自己選択」「自己決定」「意思表示」は日本では優先して考えられてはいない。さらに障害者や高齢者といった社会的に弱い立場にある人が、自分の意見を述べ、行動を決定するという自己選択の機会が限定されているのが現状

である。

今回の交流視察では、日程の関係でスケジュールが詰まっている時もあったが、訪問先では、渡辺真観君や海老原宏美さんの二人の気持ちを聞きながらメンバーみんなが一緒に行動していたと思う。

二人とも自分の意見や意思表示をしてくれたので、スムーズに動くことができた。

ただ日本の多くの障害をもった人達は、自分たちの意思を表す機会が日頃少ないためにうまくいかないことが多い。

スウェーデンでは、教育、就労、医療、住宅、といった生活にかかわる充実した社会的なサポートが確立されている様子を視察し、報告したが、その根底にあるのは、だれでも人として認められ幸福に暮らすことができ当然であるという意識ではないかと思われる。言い換えれば快適な生活は、一人一人の人権が守られているということになると思う。高い税金を納めている国民のこうした意識へのコンセンサスなしに、高い水準の社会によるサポートシステムを確立することは難しいはずである。自己選択、自己決定という本人を尊重した様子は、各視察先でいろいろと目にするのがあった。

例えば、グループホームに入居した場合、住まいに必要なものは各自で申請して購入することができるようになっている。予め市が「きっと必要でしょう」というように勝手に選んで支給することはない。普通に引っ越すときのように、必要であればパーソナルアシスタントと相談しながら、本人が判断して決めるのである。だから、グループホームを訪ねても似たような部屋は存在しない。

デイセンターにおいても自己選択、自己決定の基本は変わらない。自分にどういう仕事がふさわしいかということ、いろいろなグループを体験しながら判断できるようになっている。また、自分にあった活動をするための教育にも時間がかけられるようになっている。ハビリテーリングをみても、医師や作業療法士がいる医療チームの相談においても、何かを決定するときには必ず本人が参加する。自分に関することを知らないうちに専門家や他の人の意見だけで決められてしまうことはない。

日本の福祉の水準はスウェーデンにはまだまだ追いついてはいない。今後いろいろな政策とサービスが試みられると思われるが、あくまでも主体である利用者の人権に対する意識を常に心がけてもらいたい。

1995年12月に日本政府から「障害者プランナーノーマライゼーション7カ年戦略」が提出されている。物理的な改革は必要だが、人権に対する国民的なコンセンサスがしっかりと確立される必要がある。

今回の視察交流で、参加したメンバーの意識が変化したことはないまでもない。真観さんと宏美さんは、スウェーデンで出会った障害をもつ人たちと同様に自らが参加し、自己決定していく姿勢の大切さを確信したようである。

真観さんの太鼓の演奏は、日程の最後の訪問先でのできごとでした。様々な交流を経験し、出会った人達から学んだ姿勢が、この最後の演奏に結び付いたように私には思える。

(2) 地域・草の根欧州派遣視察の意義

今回の交流では障害をもつ当事者と親そして兄弟、介助者の構成でスウェーデンの障害をもつ人達の家庭を直に訪問したりスウェーデンのデイセンターやハビリテーリング等の社会福祉システムを実際に見て体験してきた。

これらのことは多くの点で意味を持つと思われる。

1. スウェーデンの障害をもつ人の家庭に訪問できたことである。今まで多くの視察団体がスウェーデンを訪れたが個人的なつながりで個人の家まで訪問できるケースはプライバシーの問題などあってきわめて少ない。しかし個人の受ける社会サービスというものは個人の生活に実際入らせてもらわないと具体的なことはわからないものである。実際事前の勉強会で文献を読んだのではわからなかったことや想像理解できなかったことがたくさんあったが、理解することができた。
2. 障害をもっている当事者自身が交流をしたことである。いくら社会福祉の専門家が視察をしたとしても実際に障害をもっている人達にとってその社会サービスがどれだけ障害をもってい

る人達のニーズにあっているかということを経験することはできない。今回の視察においては補助器具センターで実際に車椅子に乗って運転させてもらったり、知覚感覚訓練室で体験してもらった。そのなかで日本にすんでいて常日頃から考えている生活に密着した質問について理解することが出来た。

3. 親が同行したことである障害を持つ子どもと今まで人生を一緒に生きてきた親には切実なおもいがたくさんあった。日本の障害者福祉制度と常に向き合っていたため日本の制度の問題点や改革してもらいたい点などがよくわかった。またスウェーデンで障害を持つ子どものいる親との対談でも自分の体験を踏まえての懇談会ができて大変に有意義であった。
4. 責任者や介助者としてスウェーデンのことに詳しい人が行ったこと、また障害者と普段から接している人、障害者教育を勉強している人がいったことは、身をもってスウェーデンの福祉の実状を見聞し体験することが出来たことによって、今後の障害者福祉の活動を行うに当たって大変に参考になった。また、事前の勉強会もさることながら今後この活動をどう生かしていくかという意味で、報告会をする予定であり、彼らが視察に同行したことによって今回の交流を今後継続できる可能性が高くなった。

(3) 国際交流基金

地域・草の根交流欧州派遣事業に対する要望
今回の地域・草の根交流の視察研修は、地域に根差した、日本とスウェーデンの障害をもつ人達、また彼等の家族との交流を目的として行われた、その成果は非常に大きかったと思われる。

草の根交流の第一歩をとして今回は、日本から2組の障害をもつ本人自身と父親が、スウェーデンに行き懇談会を行い意見交換を行った。またたくさんスウェーデンの障害をもつ人達と、また社会福祉の現場で働く方々と交流し、たくさんの人脈を作ることができた。

しかし、今回の交流がさらに意味のあるものとし、真の交流となるためには、このような活動は継続されなくてはならないし、違った視点による交流を続けてさらに交流を深めていかなければな

らないと考える。

そのため、例えば今回お世話になったクリスチャンやその医療チームを日本に呼ぶということも交流の一つとして考えられる。クリスチャンは、スウェーデンで放送された日本の障害者についてのテレビ放送で、自分と同じ障害をもった人がいるということを知って、日本に強く興味をもち、日本に来て自分と同じ障害をもっている人を励ましたいと思っている。彼は重度の障害をもっているのに、彼の生き方が日本で示されるということは、日本の福祉制度に大きな問いかけをすることにもなると思う。

また今回同行した、車椅子に乗っている海老原宏美は、日本の日常生活で多くのボランティアや友達に囲まれて生活している。そのため今回の交流は父親が同伴したが、次回スウェーデンへ交流視察するときには、次期世代を担っていく若者や普段の生活をともにしている友人、介助者とともにスウェーデンを訪れ、今回のような現地の障害をもつ人や福祉の現場の人との交流をしたいと要望している。

また、同行の渡邊・海老原両氏の両親からは、3年後あるいは5年後にまたスウェーデンに今回と同じように交流視察を行い、この間にどのように変化したかということを見聞し、日本の変化とあわせて比較して考えてみたいと希望されている。このように今回の交流を基に今後も交流を継続し意味のあるものにしていくことを各自の視点から希望している。それらのための継続的な援助を国際交流基金に対してお願いしたい。

草の根交流視察訪問日程表

8月31日(土)	09:40 空港集合 10:00 チェックイン 搭乗手続 17:55 マルメ到着 (大型バス移動ホテルへ) 18:30 ホテルチェックイン 19:00 今日の一日 (反省会)	コペン: 雨 マルメ: 晴れ
9月1日(日)	12:00 ホテルロビー集合/リフト付きタクシーで移動 13:00 クリスマン宅訪問・交流 18:00 リフト付きタクシーでホテルへ 18:30 今日の一日	曇りのち晴れ
9月2日(月)	09:20 ホテルロビー集合/リフト付きタクシーで移動 10:00 知的障害者ディセンター 11:00 昼食 ディセンターにて/リフト付きタクシー移動 14:00 補助機具センター/リフト付きタクシー移動 17:00 グループホーム訪問・視察 18:00 リフト付きタクシーでホテルへ 18:30 今日の一日	曇りのち晴れ
9月3日(火)	09:00 ホテルロビー集合/リフト付きタクシーで移動 09:30 ハビリテーリングセンター視察 12:00 ハビリテーリングにて昼食 13:00 リフトつきタクシーでホテルへ 午後 自由行動 18:00 河本佳子さん宅にて交流会	晴れ
9月4日(水)	09:15 ホテルロビー集合 出発 リフト付タクシーで移動 10:30 サービスセンター視察 11:30 サービスセンター内のレストランにて昼食 12:30 リフト付タクシーでハーダへ移動 13:00 ハーダ視察 15:00 今日の一日 17:30 徒歩でリハビリテーリングへ移動 18:00 ヤングチーム喫茶の初日に参加・交流 20:30 帰路は市内バス利用	晴れ
9月5日(木)	09:25 ホテルロビー集合 出発 10:00 ムンクヘッテ基礎学校視察 12:00 ルンド大学教育学部の学食にて昼食 13:30 リフトタクシーグループホームへ移動 14:00 アネットさん宅訪問 15:30 リフト付きタクシーでホテルへ 18:00 今日の一日	晴れ

9月6日(金)	09:30 ホテルロビー集合 出発 10:00 最新ディセセンター (サーフィレン) リフト付きタクシーでレストランへ移動 12:00 リルさんと昼食 リフト付タクシー移動 13:30 FUBのメンバーとの懇親会 帰路はリフト付きタクシーでホテルへ 16:00 今日の日 17:00 自由時間 19:00 クリスチャン家, 河本佳子さんとお別れの夕食会	晴れ
9月7日(土)	09:30 ホテルロビー集合 出発 11:00 マルメ発コペン行ホバークラフト乗船 11:40 コペンハーゲン観光 自由時間 20:00 コペンハーゲン発マルメ行ホバークラフト乗船 21:00 今日の日	晴れ
9月8日(日)	12:30 ホテルロビー集合/バスで出発 13:45 マルメ発 14:20 コペンハーゲン着 15:20搭乗口集合 15:40 コペンハーゲン発	晴れ
9月9日(月)	09:30 成田着 10:30 解散	晴れ

スウェーデンへ研修の旅

海老原 昭朗 53才(トータル・インテリア)

*クリスチャン宅訪問で、まずクリスチャンと彼の家族の家の間取りが目に飛び込んできた。この家の間取りは、実に実用的で尚且つ機能的な構造になっており、車椅子のクリスチャン本人も、親御さんも快適な生活をしている様子に圧倒された。

毎日、そして何十年と暮らしていく住まいこそ、私たち親子で一番大切にしている「人間形成においても身体の機能面でも、安らぎのある建築物は大切」と改めて感じられた。特に室内には彼専用の運動訓練のためのプールがあることや、家の中を車椅子で自由自在に移動している彼を見ていて、川崎に住む私たち親子には「夢また夢か」と思い直したり複雑な気持ちになった。

「ハンディを持っている娘の宏美が快適に過ごすことができる環境こそ、親の私も快適と感じる生活ができる」と、分かっているのに現状は難題ばかりである。でも、クリスチャンの家を訪問して、色々参考になった。

*また、難病(ロブスター症候群)のクリスチャンは生まれた直後から、1年間保育器に入っていた彼の母親に通常の育児休暇(4ヵ月)しか与えられなかったことに対して、両親が「休暇延長の戦いが始まった経緯」を話して下さった。

どこの国でも親は子を守り、子の未来のために向かう姿勢と行動は必死にならざるを得ないものだと感じた。

*彼には、自宅で親と一緒に住んでいるのにもかかわらずスウェーデン社会の制度ではあるが、常時アシスタントというサポーターが付いていることは、日本では考えられないことである。しかも、本人がアシスタントの選択をすることができ、解雇もできる。つまりアシスタントの方は選ばれるわけである。

障害者の意思が尊重をされるバックアップの見事さ、本人にとって決して甘えではない、人間と国の政策の豊かさを感じた。

日本の「宏美のようなハンディを負う人々への

政策は」というと、障害児(者)への排他主義傾向(施設への勧め)が伺われ、地域で在宅生活をしていくことはむしろ、異端扱いをされているのが現状である。

何の保障も制度もない現実に対して、万が一私自身が不自由な身体になった時「家族と住んでいたい」と声を出していくことは、かなり勇気が必要になることなのである。これらのことを冷静に考えてみると、「今ハンディを負っている人たちの問題は実は、健常と言われている私たちの問題」なのである。経済大国日本の真の豊かさは、近い将来に訪れるのでしょうか。

*クリスチャンと両親の話を聞いていて実に驚いたことがあった。彼は同居をしている親に対して、自分に支給されている障害者年金から、何と家賃を払っているのである。彼の生活に必要な経費の一部には家賃代も含まれているのである。

ハンディを持って生まれてきた我が子を、親は「精神面・金銭面の全てを一生課せられたもの」という私の意識は、大きく崩れ去ろうとしている。しかし帰国をしたと同時に「夢をみていたのか…」現実に戻されてしまった。

*デイセンター訪問で感じたことは、障害者に対して、ノルマのない作業を心がけていることだった。(個人の能力を引き出すためには、人材と器材を惜しまず、また集中力を身に付けさせる手段は強要ではなく、マンツーマンで向き合い時間をかけている)。日本のようにややもすると、マニュアルを押しつけやすい作業は、苦痛以外の何物でもなくなってしまうと思う。その点このセンターは、効率の良いそして根底に「人間らしく作業をできる環境」を拝見させて頂いた思いであった。

親離れ、子離れが私たち親子の課題になっているが、クリスチャンは一般会社へ、そしてデイセンターで働いている人たちも社会参加をしながら、それなりに社会に貢献をしているのが確かめられて、「社会の受け皿がしっかりしていると思うと

同時に、人権が確保されているな」と羨ましく指を嚙んでいた。

子と同時に私たち親にも、安心した政策が一日も早く訪れないことには、子どもに対し、私の亡き後の心配が永久に続きそうです。現実日々の生活をしている中で、この不安が何より苦痛である。

*補助器具センターを見学した。センターの中には、所狭しと補装具類が並んでいました。私には非常に興味があった分野だった。宏美も書いていたようだが、「人を機械に合わせるのではなく、機械を人に合わせて製作する」の基本姿勢が素晴らしい。この一言がすべてを象徴していた。

例えば、知的や視覚障害者用の時計一つをとっても、色分け、マーク分、音、絵の工夫で「個人のニーズに合わせて、徹底的に追求をして作成した物」と一目瞭然でした。

日本では、補装具の作成に当たり、所得額によって公共から何割かの援助金があるものの（制度の条件に従わない場合は、全額負担を強いられる）、原則として有料である。

スウェーデンでは、補装具の費用は無料、無期限貸出しになっていた。貸出しに際しては何の制限もつかない。貸し出された補助器具はやがて必要なくなったときにセンターに戻ってくる。

そして新たに貸し出すときには、改造（リサイクル）してまた再び貸し出すのである。上手に資源の循環ができているのである。

スウェーデンの発想は、何事もすべて（人材の件でも、物質的なことでも）経済的に有利なシステムを研鑽して、還元し合っている。

宏美の場合は3～4年目ごとに車椅子の作成をしているが、使用済みの車椅子は、大型廃棄物として川崎市のゴミ運送車で運ばれ処理をされている。

スウェーデンの政策と比較をすると、日本の国や市の税金の使い方が違うようである。

*グループホームを見学して、やはり障害者への人権が保障をされている様子が、ひしひしと伝わってきた。

個人の確立した部屋をもって、プライバシーが守られている。部屋の間取りのあまりのすばらしさに「私が住みたい」の言葉があちこちから飛び交っていた。

グループホームには、常時数名のアシスタントが配属されているが、あくまでも本人の要求したことだけをサポートしフォローするという基本姿勢は、見事と言うほかにない。

この辺が、何事も「一定の線上に誘導し、統一したやり方」の日本とは、根本的に違っている。

*ハビリテーリングを河本佳子さん（彼女の職場）に案内をして頂いた。ハビリテーリングとは（先天的機能障害を持つ人の機能維持と生活の向上を目的とする機関）で、このセンターでは0才～20才を対象にしている。

図表 1

産婦人科→看護婦・医師・乳幼児保険センター
→小児科（病気）／ハビリテーリング（機能障害）

1の図表の体制で組まれている。医学療法士、作業療法士、理学療法士、心理療法士、本人と親がチームを組み一堂に集まり、月2回のミーティングをしながら、一人の障害児（者）の対応に当たっている。それぞれの分野の専門家の立場から、最大限の評価をして障害児（者）の方向性を見出していき、バランスのとれた人生を送ることを支えていくのである。

本人と親が孤立して行く日本とは悲しいかな大きな違いがある。

*ハーダを訪問してここのようなシステムが日本にも欲しいと感じた。

知的な障害をもつ人にとって、コンピューターを理解し、操作するという事は、大変困難と思われる。ハーダ（日本で言う職業訓練所と似ている）では、コンピューターの画面を理解できない障害者にも、とことん個人の能力、機能に合わせて、プログラムを作成し利用可能にしている。こういう教育が徹底していれば、日本においても技術の応用や開発に心がけることによって、障害者だけではなく、老人でも操作可能になりコンピューターが必需品になっていくという確信ができた。是非見習うべきである。

*感想

私の報告は以上である。娘宏美と重なる箇所はあえて割愛した。宏美と同様に「語り切れない」

の一言につきる。やはり私は体全体で吸収してきたのだと、毎日に感じている。

今まで、身動きができず、そして、抜け道が塞がれているような先細りの消極的だった私の生き方に、今回のスウェーデンでの研修は、明かりが差し込んできた喜びを感じ自信すら湧いてきた。

障害者、高齢者の問題を考えるとき「当事者である本人はもちろんのこと、その親がスウェーデンをはじめ北欧の福祉の現実を見てくるべき」だと痛感をした。今後は機会があれば他の人にもこのことを伝えていきたいと思っている。

先に北欧の福祉の視察の体験をしている妻の言っていたことが良く理解できた。

「お前は遊びに行く人、おれは働く人」これが妻がスウェーデンから帰ってきた直後に、浴びせた私の言動だ。深く反省をしている。

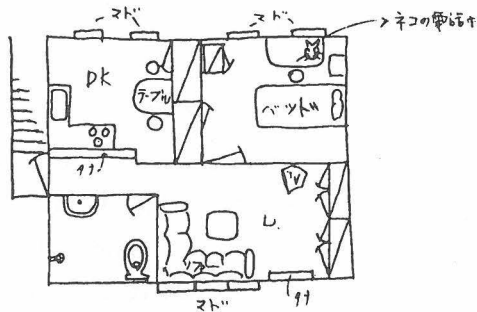
スウェーデンの政治までは詳しく勉強できなかったもので、奥の深いところは省略をせざるを得ないが、ただ、上記にもある通り「人材、器材、資源、25%の消費税」等の上手な循環が福祉国家に結びついているのだろうと思った。

決して「弱者と言われる障害者（児）高齢者のために」の発想ではなく、国を支える国民一人一人を（障害の有無に関係なく）大切にしている政策が徹底して行われているだけだと直観した。

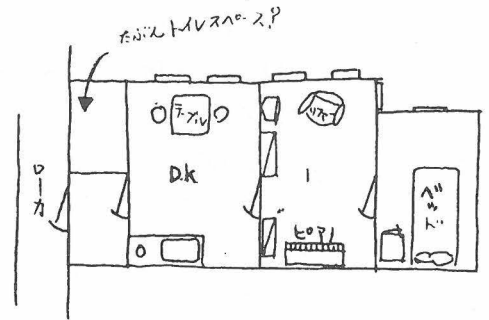
来春には日本でも消費税が何パーセントか上がるようだが、せめて国民一人一人の目に見える還元を、期待したいところである。

今回企画をして下さった方、ご一緒に同行をして下さった皆様、コーディネーターの河本佳子様感謝の気持ちを申し上げます。

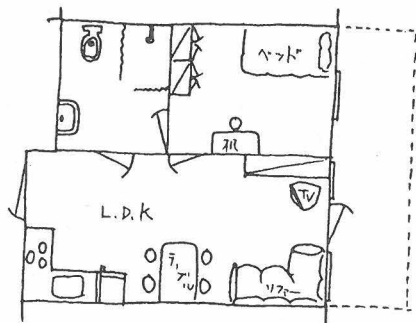
文責：海老原 昭朗



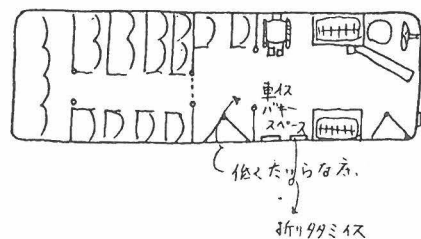
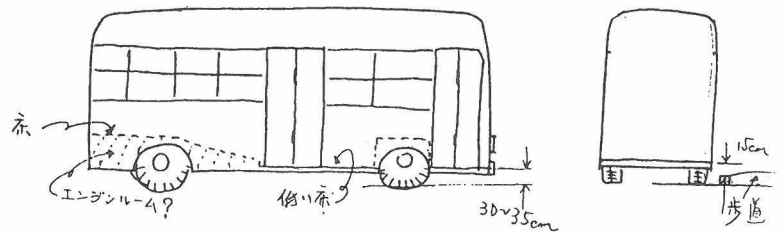
▲ロッタさんの室



▲ニットンさんの室 (19才)



▲アネットさんの室



*クリスチャン宅訪問

まず家の中で、車椅子の人が生活をしやすい条件の行き届いていることに、目を見張った。クリスチャンが運動訓練をするための室内プール有り、電動車椅子が自由自在に走れるスペースが有り、クリスチャン本人のプライベートの部屋を持っていて、家庭での日常生活を快適に過ごせる家の構造になっていた。そうした暮らしやすい住まいの環境が素晴らしく、また自分の意思で行動の選択ができる生活は羨ましいと思った。

私の場合、狭い家の中での移動の全てを、両親に委ねなければならないのでは、自分の意志で生活をするというより、回りの人たちの状況を判断しながら介護してもらおうということになるため、自分のプライバシーを保つことは困難である。

クリスチャンは現在21才。コンピューター会社で働いている。

彼の場合は小・中学校をあわせた基礎学校、そして高等学校への進学を選択は、障害をもった児童・生徒に対して建物や設備などハードウェアとソフトウェアの両面の条件整備された学校に通学した。学校生活において、物理的なあるいは精神的なことで問題が生じた場合は、先生をはじめ彼についているケアのチームのメンバーとの話し合いにより、解決がはかられたたそうである。何事についても、本人の意志の固さを訴えていくことが、スウェーデンでは当り前のこととなっているようである。

また、本人の意志と尊厳を尊重するのが原則とされているものの、そういう環境においても彼本人から「学校時代の全てが地獄だった」という言葉が出るとは、彼の場合同じ様な障害をもつ人がまわりにはいないとはいえ、夢にも思わなかった。彼の場合、小学校から学校時代はいじめに会い相当苦しんできた経緯がある。

ハンディをもっている人は全て、自宅においても学校内でも行動しやすくするために付き添いのアシスタントがつく。障害をもつ人に雇用されており、交替で援助を受けられるシステムになっている。

クリスチャンの場合は、生後まもなくから(両親は彼を出産後、産休明けと同時に仕事に復帰)現在も、自立した生活をするアシスタントための援助を受けている。

このように彼は尊重されて21才まで来たわけだが、彼は自分が「非常に孤立してきた」と訴えていた。

スウェーデンの国民は(障害の有無を問わず)一人一人の「自己主張」そして「自己の確立」がしっかりしている。それは、私たちの回りでは大変難しいことだと思った。

就職するときに障害をもっている、通常の人間と同じく国民の一人として自立をさせるという基本姿勢に準じ、一般の会社に参加し、個人が尊重をされて働いているようである。

*デイセンター訪問

デイセンターは、20歳以上の重度障害をもつ人たち対象とした仕事場である。

日本でいう厚生施設、授産施設に近いと思われるが、内容は全くと言っていいくらい違っている。

ここに通う障害者には仕事のノルマはなく、その人のペースで仕事をして過ごすことができる。コミュニケーション、産業、染物・織物、封筒作り、包装などの5部門があり、各自が自分で選んだ作業をしている。ここでの仕事は、日本のような作業でもトレーニングでもなく、強要のない仕事が保証されている。

また他にはサービスグループがあり、洗濯、掃除、電話番、花の水やり、などなどの仕事がある。これらは自分の絵表(ピクトグラム)の時間割を見ながら一人一人が自分の仕事として自立しており、先生(パーソナル)はあくまでも必要などきだけ援助する。

このデイセンターに通う手段はタクシーを利用するが、本人の生活に必要なお金は障害者年金などによって保障をされている。

日本では、作業所で働くことができる人は運の良い障害者といえるが、一ヶ月の賃金として支払われるのはわずかに1千円~3千円である。交通費

(親の送迎)や弁当代は自分持ちとなっている。

私は現在も将来もわずかな障害者手当(月々数万円)を頼りに、両親の収入に依存して生活をしなければならぬという現実があり、それは悲しい苦痛そのものである。

このデイセンターで働く障害者はほとんどの場合65才までである。稀な例として市役所の食堂や喫茶店等へ転職した人がいたが、65才以降は年金生活者としての生活をしていくようである。

またデイセンターの室内は、日本で言う施設のイメージはない。明るく、楽しそうで、作業部門ごとに広いスペースがあり、「やはり一人一人が尊重をされているな」と感じられた。

本人の希望を取り入れて体育、散歩、音楽、コンピューター、英語の勉強など好きなことに取り組む時間もある。いいですね!!

日本のシステムではどちらかといえばマニュアルどおりに一方向へと向かせるように物事が強要されがちに思われる。

このデイセンターのお話では、「その人ができることを支えてあげる」このやり方のほうが、結果的には能率が良いそうである。

*グループホーム訪問(ロッタの家)

グループホームに住むロッタは30才。一戸建ての家で一人暮らしをするのはいやだったので、仲間と交流できるグループホームの生活を選んだようである。

生活の形態として、親と同居する、アパートで1人暮らしをする、グループホームというように選択肢が色々あって、本人の意志が尊重されている。もちろん、生活の(物理的、精神的、金銭面)が保障をされている。日本のように何事全て、本人と両親の負担で終えることはスウェーデンでは考えられない。

私たちが訪問をしたグループホームには、今6人の障害をもつ人が住んでいる。

ロッタの場合は、土・日に親の家で過ごし(自由選択)ているが、他の人はホームでほとんど生活をしていました。このグループホームには、常時11人のスタッフ(アシスタント)がいて、以下の2種類がの仕事があった。

・パーソナルアシスタント=生活上の介助

・コンタクトパーソン=問題が生じたときの解決相談者

ロッタの話聞いた。

彼女はデイセンターに勉強に通ったり、一般のトレーニングセンターの掃除の仕事をしている。交通手段はタクシーを利用。グループホームの中の彼女の部屋は、生活必需品の全てが、自分の好みで揃えてある。

ロッタの部屋(一人一人に割り振られた部屋)の見事さ、広さ、快適さ(6畳キッチン・6畳・10畳の部屋・5畳前後トイレ、シャワー室)などが用意されていて、同行をしたみんなで「私が住みたいよう!」と羨ましがったほどであった。

精神面では、ロッタの必要に応じ援助を欲しいと伝えた時にだけ、アシスタントのサービスをうける。日本では健常者は、自分の要求を当たり前前に満たしていきますが、障害者は制約をされます。同じ人間なのに……。

私は日本では障害者(児)に対する意識が置き去りにされているように感じられてならない。「障害をもつ人の生活の問題を原点として、教育その他の在り方を考えることが、高齢者の問題の解決への一番の近道だ。」が私の個人的な持論である。

*ハビリテーリングセンターの訪問

私は最初「リハビリのり、が抜けている何故だろう」と興味深々だった。

・リハビリテーリング=中途障害を背負った障害者が、元の機能に戻す訓練のこと。

・ハビリテーリング=先天的にハンディを背負っている障害者を元々の機能や能力を維持できるように訓練をすること。

ハビリテーリングのセンターを訪問して感じたことは、日々の生活の向上を目的にしているのはもちろんのことだが、訓練をする時には楽しみながら苦痛を与えず、マニュアルを強要しないという考え方を基にしていることで、本人が喜んで興味をもつことができるような訓練をおこなっている。どちらかという遊園センターのような印象を受けた。

例えばマクドナルドに設置してあるカラーボールのプールで遊ぶことができるようになっており、それが楽しくできる「訓練」につながっているの

である。いいでしょ。

「本人が興味を示さない訓練は身に付かない」という基本的考えが浸透されているのである。

このセンターで働いている河本佳子さん（スウェーデン在住）が、案内をしてくれた。

*ムンクヘッテ基礎学校（統合教育）訪問

私たちの訪問したムンクヘッテ基礎学校は、統合教育に力を入れており、マルメ市のなかで最も設備も充実しているため、この学校には偶然にもマルメ市の郊外の遠方からも生徒が通学してきている。何と80キロ先から通う児童もいた。交通手段はもちろんタクシーである。

この学校は東京にあるようなマンモス校ではなく、20人クラスで小学校1年生～中学校3年生まで、9年制で全校生徒が350人であった。

その内の約一割の37人がハンディを負った児童である。この普通学級に通う障害児は、子どもたちと分け隔てなく過ごすことが、モットーとされている。

ただ統合教育の学校と言われている学校だが、特別クラスもある。全てにわたって普通クラスで学習しているのではなく、子どもたちの障害を考えて、うまくコミュニケーションがとれるようにするためである。

スウェーデンの学校における特別クラスの位置づけは、「やがて成人をしたとき、社会参加ができて社会に貢献できる人間を育てていく」であり、この基本姿勢の一貫した教育をしている。

ここで私個人の感じた日本とスウェーデンでの「普通学級、特殊学級」という質の違いを、書いて見ると、日本では（少なくとも川崎市では）先ず小学校に入学するとき、本人の意志は尊重をされない。そのため普通学級に入るときは「勝手にどうぞ」という態度が学校側はじめ教育委員会からとられる。親は学校生活に関する一切の責任を負わなければならない、特別援助が必要なら、親の付き添いを条件に「ハンディを負う児童は、クラスの中に置いてあげる」ことから学校生活は出発しなければならない。つまり障害児を健常児から切り離す排他主義が教育の現場ではまかり通っているように思われるのである。「大人の都合や制約で左右されてしまう」と言っても過言ではない。

このような統合教育に逆行する日本の現象は、障害児教育の在り方が「明治時代に作成された憲法を、今なお変えていないからだ」と言われているが、正直なところ私にはこの辺が良く分からない。

一方スウェーデンはというと現状の教育方針は、「子供は同一ではなく、障害の有無を問わずに、一人一人が異なる権利を持っていることを認める。」つまり、健常児と言われる児童の権利を守ると同時に、障害を負う児童の権利も同等に守られている。そして障害の有無と又、重軽度に関係なく、「一人一人の子どもの人生の全部を考慮。」をしていく教育を目指しているのは、すごいと思った。だから普通学級でも特別学級でも、日本のような分離教育とは異質のものだと、感じてきた。このことはこれからの私にとって「すごく大切にしたい」勉強だった。

私たちが訪問をした学校の、障害児に対するシステムを紹介すると、学校では「子どものニーズ（子どもの人生全部を考慮）に合わせた情報交換」の体制が整っており、この体制を基本に対応が行なわれている。具体的に述べると、多方面のメンバー、本人＋先生＋アシスタント＋ソーシャルワーカー＋医師＋技術者＋言語療法士＋作業療法士＋理学療法士＋心理療法士＋両親が、問題に応じて一堂に集まり、情報交換をしたり、問題解決のための話し合いを徹底して行うシステムが、設置してある。

教育の仕方次第で、何もできない人間に仕立て上げられる不安がないのが、羨ましい限りだった。

*補助器具センター訪問

私はここで展示をしてある電動車椅子試乗したが、自分の思うように自由自在に楽しく走れた。またそれらはカラフルで補装具としても、すてきなメガネを付けているような気分がした。私が今日本で愛用している電動車椅子は、制約が多く（年齢制限、使用目的の申請、知的身体条件、形を設定されている、速度制限付き等々）、使っていて不自由を感じる。

スウェーデンではハンディのある人が必要な補装具、補助器具は、日本のように当事者が業者から買うシステムにはなっていない。あくまでも無

期限にコミュニケーションから借りて自分あったものを使用することができる。

私はどちらかといえば補助器具を購入する手続きをする場合、「作って頂く」という低姿勢の気持ちで、役所の窓口へ申請をしに足を運ぶのだから、スウェーデンでは、当事者の主体性を尊重し、本人のニーズを徹底的に追求をして補助器具を作成をする。

「人を機械に合わせるのではなく、機械を人に合わせる」ことが基本姿勢としてある。

また、車を運転したい方には、その人に合う車がないから諦めさせるのではなく、その人に合う車を作成する。

障害を負う人たちが如何に快適な暮らしを営むことができるか、強いて言えば、いかに効率よく動くことができ、貢献（社会参加）できるか、研鑽されるのです。国民と社会の両者が満足できることになり、「一石二鳥」っていうことである。

*感想

9泊10日の研修は、あと、1~2ヵ所見学をしたところがあったが、私の父が親の立場での報告書に書いているので、あえて省略した。

クリスチャンは、だんだん骨が壊れていく病氣（ロブスター症候群）のため、頭部、手足の変形がひどく体長が一歳児ぐらいである。日本の社会で暮らすとしたら、彼は一体どういう待遇を受けることになるだろうか。想像もできない。

将来、私も彼のように一般社会に親以外のサービス（日常生活の身の全面介助）を受けて社会参加をしたい!!

クリスチャンには沢山のことを感じて、学んできた。ハンディを負う当事者宅を訪問し、直接逢えたことが、今回私の大きな収穫だったと思う。

またスウェーデン滞在中は、クリスチャン宅やハビリテーリングセンターなどで、佳子さんの通訳と案内があったからこそより深い、より楽しい研修ができた。

さらに佳子さんには、自宅で、スウェーデンの伝統行事であるザリガニパーティーまでして頂き、本当にお世話になり感謝感激である。改めて「ありがとうございました。」と言いたい。

また、佳子さんは以前、日本人お役所の方々視

察団一行の、案内と通訳をしたことがあったのが、その時の経験、体験から「もう二度と日本人の接待はしない！」と心に決めていたらしい。でも今回は、私たちのために引き受けて下さった。私は今回のスウェーデンでの研修は、佳子さんのコーディネートがあったからこそ、素晴らしい旅ができた、感謝の気持ちでいっぱいだ。

この地域・草の根交流派遣の視察を通して私の得たものは、紙面では到底書き切れないし、伝え切れないほどたくさんある。視察の成果をこれからの生活の中で私の体の中で応用をしていくのだと考えている。

こうして書いてみて、改めて「ものすごく貴重な体験をさせて頂いたのだなあ」と思った。

ハンディを背負って生まれたその瞬間から歩き出す出発点が、日本とは比較のしようもない水準の法律や政策やサービスと対応があって、同じ地球の上に住む人間として、複雑な思いをた。

社会に貢献ができるように「その人の人生の全部」を多様な専門家に見守られ、保障をされていく教育には、「役に立たない人間とレッテルを貼られ、本人と親だけに責任があるかのように、悲観的に人生を送らざるを得ない日本の体制」との違いに、ショックを受けている。もちろん日本にはスウェーデンにはない良さが多々ある。一長一短があると思う。しかし私が住んでいるこの世界が、もう少し弱者と言われる人間に対しての対応、「例えハンディがあっても、一人の人間として尊重をし、その原点を見つめて欲しい」と痛切に思った。

スウェーデンと日本は基本的な政策が違うので、私は声を大にして「同じにして下さい」と、叫ぶことは難しい。でも同じ地球で生きている人間として、多様な生き方がある事を知って、私の心は豊かになり広くなりった。些細なことをくよくよする自分ではなく、寛容な気持ちになれる私がいて、楽になったような気もする。

今後はこの経験を生かし、できれば来春の大学受験の合格を目指し「心理学、あるいは社会心理上の勉強をしていけたらな」と考えている。私も将来、社会に貢献できる人間目指していきたい。

スウェーデンに行き、質問のなかで一番困ったことは、私が浪人生であることの説明にであった。

スウェーデン人は、大学受験のための予備校なんて「ない世界」にいるのである。

今回お世話になった沢山の皆様に、心から感謝を申し上げます。この地域草の根交流スウェーデン視察団が、「親子研修でも、場合によっては友

達と研修でも」のような違ったテーマで来年もそしてその先も、継続して頂けるようお願いしている。私も協力者の一員として、見守り続けている。

1996. 9月 文責：海老原 宏美

「障害をもつスウェーデン人と日本人との交流を通じて 考える、快適な生活のための社会サポート」レポート

渡邊 照敬・真観

I 交流

9月1日 午後1時 クリスチャン宅訪問

彼と両親が出迎えてくれた。ご家族からビデオやカメラの撮影の許可をもらう。

クリスチャンは一人一人に握手をしてくれた。「ビデオをとるからもう一度」というと「かんべんしてくれ」という。クリスチャンのパパは何人も来てるから大丈夫だというのが。結局、海老原宏美ちゃんと真観がもう一度挨拶してそれをビデオにとる。

クリスチャンのために作られたキッチンを見せてもらう。電磁式の調理台や流し、戸棚が電動で上下する。クリスチャンがいうには、卵やメレンゲ粉をこねるスペースが狭いそうだ。

トイレはバスルームも兼ねて、日本で云う6畳間ぐらいはあるであろう。その奥にはプールがあり、(15×10メートルくらい)頭に特別の浮袋をつけて泳ぐ。この浮袋はもともと補助器具センターにあったものを彼用に開発したものである。

電動イスは室内用と室外用に分けて使用し、一回のバッテリー充電で一日使える。それらの車イスはハビリテーリングから生涯借りていられるものである。何か問題が起こったとき助けを呼ぶ携帯電話がついており、シートは彼の体に合わせて、型がとってある。初めは電動イスは外出用だけで、室内では手動のものだったが、ハビリテーリングと討論の結果、室内用の電動イスを手に入れることができた。何事もスンナリとはいかないものである。

ベッドの横には机が備え付けられておりピクター433Dsというパソコンが置いてあった。もちろんここからも職場やその他に回線につながり、在

宅勤務ができる。だがかれはあえて、職場へ毎日リフト付のタクシーで出勤する。

職場は彼の住む地域にあって、30~50人位の人が勤めている。クリスチャンは彼の責任において職場の新聞を発行し、統計などをコンピューターに入力する仕事をしている。高校を卒業して2年になるが、これから、ハーダーのマルチメディアコースに行くつもりである。インターネットをしていますか、との質問に今は使っていないけれども、そのコースに入れたらそこで使えることになるだろう、と語った。

コンピューターは夕方講習に通ったが、クリスチャン自身はほとんど自分自身で習得したという。マルチメディアコースにいけば幅広い職業が得られる。ハーダーでは、10名の生徒を受け入れるが希望者は15~6名いるらしい。期間は44~45週間である。

いまの勤めは8時から3時までで、土曜、日曜は休み。クリスチャンの収入は給料と云うかたちではなく、コミュニケーションからの援助金でその中から25~30%の税金も払う。足りなくなったら親にせびる。

小学校は近所にある学校へ行った。学校に入学する1年前からクリスチャンのために車イスで入れるように改造することを希望、入学までにはすっかり直してくれた。そのため、ほかの障害をもった子供も入れるようになり健常者も障害者も一緒に学ぶ。しかし、小学校のクラスメイトの進むべき中学校は物理的障害があるため、勧められて、統合教育をしてくる中学校へ行き健常者と一緒に勉強した。

小学校の大きい教科書や問題集では上の方が見

づらいし、鉛筆で書くと力があるので早くからコンピュータを使っていたが、教師がテストの計算をズルしてコンピュータでやったんだろう、といわれたこともあった。タイプライターも指が動かないのに全部の指を使えと厳しくいわれた。

クリスチャンのいまの仕事場は実習生として夏休みアルバイトに行ったところで、障害者を受け入れている会社である。はじめ、コミュニンが仕事場までのタクシーを用意してくれないので、新聞社に訴えると父親が言ったら、すぐ用意してくれた。一年前もホルティベルグ市でクリスチャンと同じ病気の人達の合宿があったが、マルメのコミュニンが申し込み先が判らないと言ったり、それが解決すると、タクシーが準備出来ないから参加出来ないといわれた。そこで父親は色々な人と話し合っ解決した。意志を強く持つことが大事である、と父親は言う。

職場から帰ると彼専用の電動のオートドアから家に入る。家の周りには泥棒が入るとそれを知らせるアラームがついている。

2階は両親と弟の部屋で、コミュニンが援助してくれるのはクリスチャンの部屋だけなので、借金が大変だとパパは話していた。床を張ったり、造作は自分でつくたとのこと。

この家を改造するにも5年かかっている。隣の家とは4メートル半離せとか、なかなかコミュニンも許可しなかった。

クリスチャンの家はもともと別の所にあった。医療の関係で今のところに建てたいといったら却下されたが、弁護士に助けられて許可を得ることになった。

このたび改造するにも裁判になり、最高裁までいった。一番の反対者は隣の人で彼にも身体障害者があり、身体障害者協会の副会長を勤める人にもかかわらず、日照権が侵されると、いまだに争いがつづいている。

「クリスチャンの権利は守られていると思いますか」との質問に「自分の権利は当然守られるべきだ」と答えた。

「マルメ市の福祉は以前よりよくなったのか、厳しくなったのか」との質問に「昔に比べると厳しくなってきた。たとえば、電動イスのタイヤも自分で買わなければならない。法律的にはよくな

ったが、経済的には厳しい」

1994年にアシスタントは何時間必要かという調査があって、その調査方法に問題があった。調査員がくる前に4枚のレポートを書いたが、職場ではアシスタントはいらないのではないかとか、アシスタントは11時間ということになった。もっと長くして欲しかったので、コミュニンの裁判所に訴えて、受け入れられず、県に言ったら、またコミュニンに戻され、結局、13時間半、サマーハウスの時は24時間のアシスタントが付けられるようになった。

「アシスタントのサービスに満足していますか」との質問にクリスチャンは「たんなるアシスタントとしてでなく、友人としてつきあっており満足している」とのことだった。6人いたアシスタントを一人やめさせ、（彼女は来てもベッドでねころがっていたから）5人いる。ポーランド人のアシスタントを特に気に入っている。ハンスは料理ができなくて、彼といっしょに料理したとき、塩漬けの魚を塩だしするのを忘れて、ひどく不味かったし、また電球一つ替えられない。

アシスタントの時間表を作っているが、彼ら自身がフレキシブルだから各自の都合で変更する。クリスチャン一人をおいて両親と弟がサマーハウスに行くことになったことがあった。アシスタントが急に病気で来られなくなり、サマーハウスにクリスチャンも連れて行くことになった。スウェーデンでは16歳までケア援助があり、それ以上は個人におりてくる。「日本にもそうした援助がありますか」とのクリスチャンの父の質問に、海老原さんは「所得や障害の程度によって違う」と答えられた。スウェーデンでもクリスチャンの生まれた時は収入にあわせてだった。母は15年間働いていなかったの、年金に響いてくる。今は、母は6時間勤務、父はフルタイム、クリスチャンは働いている分、家賃を払っている。夜10時以降は風呂に入ってはいけないとか契約しなければならないので賃貸契約書を買って来なければね、と冗談をいう。

クリスチャンが生まれたのは1時20分ごろで、6時ごろレントゲンを撮って、判っていたはずなのに、障害があることを翌日知らされた。1年間保

育器に入っていた。産休をもらえるのだが、看護援助の必要性を4週間しか病院では書いてくれなかった。それから父の闘争が始まったのだ、とのこと。小さいころからすぐに、何度も骨折する。5~6年前ショートステイホームでイスから落ちて骨折した。母がオスロの会議から帰ってくるので父が迎えに行ってる間、痛がるので病院に連れて行ったらやはり骨折していた。

最近、テレビで放映されたビデオを見せてもらう。10時間かけてとったのを1時間にまとめたものである。朝起きてから、洗顔、ヒゲ剃り、シャワーを浴びる、体に石鹸をつけて洗ってもらう。ハビリテーリングの医師が生まれて数ヶ月の骨折を撮ったレントゲン写真を見せている。射撃大会でクリスチャンはトロフィーをとっている。インタビューがまわりには素敵な女性もいますが、と尋ねる。友人もあまりいないからガールフレンドもない、自分の姿を見ればなんともできない、とクリスチャンは言う。卒業式の写真が自分のシンボルだ、とも言う。他の卒業生は肩を組んでいるけど、クリスチャンだけ車椅子に一人乗っている、新聞にも掲載された写真のことである。冷蔵庫を開けて卵を取り出そうとしているが、扉がすぐ閉まってしまう。プールで泳ぐシーン、これ以上泳げないと言う彼に父はもっとできる、と言う。溺れそうになって棒で引き上げられる。洋服を買いに行く場面もあった。このビデオは他の国の放送局(ノルウェー、デンマークで放映権を買った)でも放映されるらしい。

20歳までのドクターとそれ以上のドクターは交替するが、医療チームにきちんと引き継ぎされるので心配はない。コミュニティとしては障害者が施設にいと金がかかるが自宅にいたほうが金がかからない。人間の価値は自分で自立するほうが保たれる、と彼は考えている。日本でいう小学校、中学校に当たる学校時代は地獄だった。その時は高校を卒業するという目的があった。いまの目標は運転免許をとることと日本に行くことである。テレビに出たときも両方言ったのに日本のほうはカットされた。頭髪は美容師が刈りに来てくれる。友達とかみんなが自分のことを考えてくれる。だいたい自分のことができるけれどアシスタントが必要である。

[なにごとにも主張しなければ行政は応えてくれないというのは、日本も同じである。ただし、それがどこまで国やコミュニティがサポートしてくれるか、となると日本とは雲泥のひらきがある。クリスチャンの家庭は明るく、ジョークがとびかい、訪問する前にいっていた重苦しい思いはふきとんだ。

帰国まえにもう一度、夕食会でクリスチャン一家と会うことができ、スウェーデンにきてもっとも素晴らしい時を過ごせた。ハンディキャップのあるなしにかかわらず、クリスチャンの両親やまわりの人々が人間存在とは何かを、きちんと教育した賜物と思った。ビデオで見た、「ガールフレンドもない、自分の姿を見ればなんともできない」、といった彼の考え方には、賛成できなかった。同行した娘も20代初めの子が陥りやすい考えだ、彼は十分魅力がある、とっている。/照敬]

[家に入って初めて会ったとき、ちょっとその姿に驚いたけれども、一緒にいる間にクリスチャンはちゃんと自分のことは自分でやってると判って、すごいと思った。一緒にお昼を食べたが、ちゃんとマナーもできていて、自分もきをつけなければ、と思った。好きな食べ物はチキンと魚だそうである。すごく楽しい勉強会だった。/真観]

9月2日 9時50分デーセンターに行く。

Söertorps Dagcenter

ここは知的障害をもった人のための仕事場である。所長に会う。部屋は全体にカラフルで明るい。更衣室は橙色であった。トイレには左右にバーがついていて、使う人の障害に合わせてバーが上にながったりするようになっている。運動のための部屋もありマット、巨大なボール、鏡、バスケットボール、階段、自転車のペダルなどが用意されていた。サービスグループの人達が床掃除をしている。歩行器を使って歩行訓練をしている人がいた。

封筒を作る作業をしている部屋もある。ベニヤの型を使って封筒のものの型に切り、のり付けをする。障害をもっている人も皆なにかができるので、たとえば封筒に色を付けたりする人もいる。この封筒のデザインは、頬紅ブラッシを使ったりして行われている。各々の先生は、それぞれの生徒の

特徴や性格を知っていなければならない。机にまじきりがあり、分けた場所は一人で作業をする所を確保している。作業療法士がイスを調節し、障害に合わせて補助器具を合わせるようにする。手芸の部屋はテーブルクロスなどにスクリーン印刷でプリントしたりする。車イスに染料をつけて布にタイヤの跡をつけても綺麗なプリントが出来る。厚紙の型を置いて塗ることも出来る。陶芸も同じ部屋でしている。陶芸は手の訓練にいい。

ここのデーセンターにはミュージッククラブがあって、ドラムやボンゴが置いてあった。ここに所属していなくても、ここに来て、グループに参加している人もいる。歌うだけの人、踊るだけの人、障害の程度に合わせて参加する。かなり重度の人のために日付を廊下にずうとはって一年が長いことを教えている。

織物の部屋では、緑、赤、青、と色彩感覚が豊かな織物である。糸の細い方がむずかしいらしい。染めた生地からスモッグを縫う人、刺繍をする人、さまざまである。時間割ができており、来てその人がなにをするか、絵文字で示している。ミーティングをする。会社からくる金はいったんコミュニケーションにいき、働いた所に降りてくる。食事にいたり、映画に行くときはお金を貸してくれる。

まず最初デーセンターにきたら何の仕事があるか、いろいろ試してみる。またいったん決めた仕事でも気が変わったら変えてもよい。皆、障害者年金を貰い、さらにデーセンに来たことよってコミュニケーションから補助がでる。

マジックテープの袋詰めをしている部屋があった。堅いテープと柔らかいテープをセットにして袋に詰め、商標のついた紙を挟んでホチキスで留める作業である。木工所ではモビール、トラックのおもちゃ、ニルスの乗ったガチョウ、セメントのこて、お祭りの時飾るもの(ミトソマル?), 額縁のマット、いろいろな物を作っている。

サービスグループは6人いて(この日は休暇や病気で3人)洗濯や掃除、コピーをとる、電話にでる、花の水やり、食堂では食器洗い機を使ってあとかたづけをする。ここに来たら朝の会で健康をみて日付の確認をし、コーヒーを飲んで、新聞を読み、スケジュール表をみる。そして自分で仕事を始める。アシスタントは目を配っていて、大

事な所をコントロールする。ご飯をたべ、日記を書く。グループと個人の日記がある。グループでの体育があり、散歩に2キロ歩く。バスに乗ってでかけることもあり、2つの場所のどちらに行くかとなったときは、ディスカッションして決める。個人的に英語やコンピューターを習っている人もいる。

重度のひとのために、トイレにはリフトがついており、トイレをして体が汚れたらリフトで運び、体を洗うことができる。洗面台は上下できる。コミュニケーションクラスはかなり重度で計画表に絵のついたスタンプを押し、いまなにをすべきかを確認させる。日記連絡簿にスタンプを押し、なにをやったか家人に知らせる。話すことができない人のため手話やスタンプでアルファベットを教える。コンピュータで色の認識、数学、単語、時計、お金などの勉強をする。

デーセンターは65歳で定年になり年金生活者となる。デーセンターで技術を覚えて外の会社に勤めることがあるかの質問に、いまは、健常の人も失業率が高いので外で働くことは難しいとのこと。ただし図書館や博物館に喫茶店をもっていて運営している。

マルメには10のデーセンターがあり、中途障害の人のためのデーセンターもある。ここに通ってくる人は遠くからくる人もいる。それは内容に特徴があり、たとえば演劇などである。いまここに通う人は53人で、マルメ全体でデーセンターに通う人は460人である。

われわれはこの食堂で昼食をとったが食事代はプレゼント、見学料も普段はとっているようだが、いらぬ、と言われた。真観はパソコンを実際にやってみた。

[日本の共同作業所と違うところは、割り箸の袋詰めといった単純作業ばかりでなく、機織り、木工など、出来上がった品物がちゃんと商品になっている。日本へのおみやげはほとんどここで調達できたし、差し上げた人が感嘆するほど綺麗なものであった。指導の問題もあろうが、日本でも何がその人にできうるか、という個人個人への対応が望まれる。今年度のカンヌ映画祭の主演男優賞の一人が、知的ハンディキャップをもった人であ

ったことを思い起こせば、ハンディキャップをもった人々の可能性をゆっくりとさぐれる余裕が欲しい。／照敬]

[コンピュータでの勉強は小学校の時、学校でも家でもやった。いまはコンピュータの自分用の機械がないけど欲しいと思う。昔やったコンピュータができて、ちょっと緊張したけど楽しかった。作られていた木工とかは芸術的だった。僕は布の袋とハンガーをおみやげに買った。／真観]

1時35分 MASという病院の補助器具センターへ行く。MALMÖ ALLMÄNNAN SJUKHUS.

ここの補助器具はすべてレンタルである。マルメとルンドも含めてスコーネ地方でこの活動が始まった。貸していた補助器具が返ってくるとコンピュータに入力する。返却するときは、きれいにしてお返しするのだが、ここでも洗浄、乾燥してから工場の専門家がチェックしてそれぞれのパーツに分けて棚にしまう。修理工場があり、返ってきたものや現に使っていて壊れたものを修理する。午後はここまでもって来られないものを修理しにでかける。

マリアンは補助器具としてないものを作り出している。たとえば体が傾く人、足がまっすぐできない人、立つことができない人にクッションを作ったり、マットを人型に切り抜いたりする。外国旅行の多い人のためにトイレへいきやすい車イスを開発したり口の息だけで運転できる電動車イスもある。

車イスは一年間1500台が使われる。体の大きい人用の車イス、室内用、室外用、シンプルなもの、シートがリクライニングするもの、アクティブなスポーツタイプ、手だけ使える人用下半身が使えない人用、車イスは200種類ほどある。車イス背中や尻に敷くパットも水でふくらます物、ふつうのマット、宇宙飛行に使った物、自転車用のポンプで膨らませる物、尾てい骨の所が少し高くなっている物、ゼリー状の物が入っている物など、使う人のためにいろいろ考えられている。キッチンにはクリスチャンのと同じようにモーターで上下に動く。知的障害の人のための時計は15分ごとにランプが消えていくものや一周すると24時間の時計がある。黒が寝ている時間、黄色が自由時間と解

るカードのもの、何時に食事をするかが解る、2時間前に黒が次々に消えていく。変更があれば電話で入力ができる。それぞれの曜日に色がついていて一週間なにをしなければいけないか、たとえば髪の毛を切ったりなどが解る。食べ物の買い物にいくときは、買うべき物の写真を持って行く。それは「ICA」というスーパーマーケットから買ったものである。台所もレンジならどのスイッチを入れればどのコンロがつくのか色の印をつける。洗面台も上下し、鏡が前に出て来たり、お尻をふけない人のために水が出て乾かすことができる。お風呂も膝や腰の悪い人のためバスタブにイスのようなものが入っていて水圧で上下する。トイレにリフトをつければ、便器から立ち上がるのが楽になる。ベッドもかなり複雑に上下できる。普通のベッドに板のようなものを乗せて電動で上下できるものもある。

[日本にもある補助器具が多いらしいが、わが家では実際使用していないので日本にもあるのかわからないのかよく判らない。私にとっては感心させられるものばかりだった。／照敬]

[幅広く活動していることが判った。個人の権利が守られているのはいい。リフトとか電動のイスに乗ってみた。ちょっと怖かった。／真観]

17:00 グループホームを訪問する。2階のロッタの部屋を見せてもらう。彼女の趣味である陶芸の自作の品が飾ってある。リルが普通高校の先生だった時、ロッタは生徒で、卒業後、ロッタはトレーニングセンターの掃除係として働きに行っている。ロッタは軽い知的障害があるようだ。土曜日曜は父母の家へ行くそうである。部屋に置いてある物は全てロッタが選んでいる。ピンクが好きだそうで、部屋は明るく奇麗である。

家賃も払っているが、父親が支払っているのだから彼女自身は知らないらしい。ネコの形をした電話機はクリスマスのプレゼントである。現在、30歳。仕事に行く前には朝ごはんを作る。朝食は一人で食べる。片付けが得意で、掃除もちゃんとする。洗濯機も自分用のをもちっている。呼ばない限りパーソナルは来ない。下の階にはめったに行かない。昼は職場で食べる。夕ごはんはこのキッチンで

食べる。

かわいい花が生けてあった。父は郊外に農場をもっていて、その花はその庭からとってきた、という。金曜日の夜、父親が車で迎えにきてくれる。高校までは両親と住んでいたが、3年前にここに住むようになった。このことは、もちろん両親に相談はしたが、ロッタ自身が決めたことである。ほんとうにたった一人で住むのは寂しいのでグループホームを選んだ。会社には定期券をもって普通のバスで通っている。また、一週間にデイセンターに二回、勉強に行く。

このグループホームの一階にはサービスを受けている人が5人いる。いろいろの援助が必要である。彼らはそれぞれ部屋をもっていて、トイレ、キッチンがついている。真ん中に共通の居間があり、共同の大きめのキッチンがあった。それぞれの部屋を見せてもらったが、一人は2学期制の学校へ日常生活の訓練に行っていて留守であった。どんな重度の人が入室してもすぐ使えるように、それぞれのバスルームには天井にレールがついていてリフトで介護ができるようになっている。51歳の脳にガンがある女性の部屋はバスタブは座ると自動的に浴槽に入れる装置がついていたし、洗面台も電動で上下する。彼女は食事を作ってもらって、1階の皆と食べる。職員は夜間勤務を含めて11人おり、一人につき二人ついている。アシスタントはいない。サービスを受けている人たちは音楽に興味をもってピアノをひく人、演劇をやっている人、今日行ったデイセンターに通って働いている人もいた。職員の対応も感じよく、外のグループホームで同行の海老原さんと同じハンディキャップをもった人がいるので会ってみたらと言ひ、調べてくれて連絡をとってくれた。その人がスケボーのようなものを上手に使っているというのである。

[ロッタは背の高い女性、日本人の黒髪がやたら気になるようだった。一階の見学の時もついてきてくれた。日本では、病気が進まなくなると診察の点数が出てこないの、病院の経営上転院を勧められる。ここの51歳の女性のように職員がサポートしてくれる施設が一刻も早く日本にできなければならないと思った。／照敬]

[ロッタの部屋はきれいだった。話はよく判らなかつた。ロッタが僕の頭を触った。なぜだろう。／真観]

9月3日 9:42 河本佳子さんの勤務するハビリテーリング BARNKLINIK HABILITERING SAVD. へ行く。ハビリテーリングは生まれたときから障害をもった人の能力を現状維持させ、残存能力をいかにひきだすかの療法をする。0~20歳の人がそれを受ける。最初にエンジニアに会って電動車イスを借りる。レセプション、待合室、秘書室、理学療法士・作業療法士の部屋、治療室を見せてもらう。

治療はすべて一人で受けることができる。テストルームがあり、まず、このハビリテーリングへ来る必要があるか判断する。ちいさい子供のためか、砂場、引き出し、家の模型、小さい階段、テント、ままごと道具、ポーバツメソードのボールなどがあつた。患者はパーソナルナンバーで、どの医者にかかったかわかり、カルテも見られるが、プライバシーの保護のためコードナンバーを入力しないとカルテは見ることができない。子供が生まれると定期的に検診があり、病気に対しては小児科、機能に対してはハビリテーリングがみる。幼稚園や小学校もすこし問題が感じられる子供をハビリテーリングに依頼して見てもらう。赤ちゃんや子供の機能を判断し、ハビリテーリングに通うべきか決めていく。

ここでは患者600人にたいして65人の職員が働いている。2週間に一度全体会議がもたれ、半期に一度、職員全体が集まって3日間合宿し、交流をしたり、討論したりする。「民主主義で多くの意見が反映しているのは判るが、他にはどんなことが考えられるか」との質問に「人間の価値を重視する個人主義だと思う」と言う答えであつた。さらに、人が自活していくのが自然だという考えである。

次に体育館、プールを見る。体育館はどこの学校にもあるスタイルである。プールは浅いプールもあつて、車イスごと入れたり、リフトを使って重症の人も入れることができる。自動的にプールのゴミを除く掃除機が回っていた。更衣室にもリフトがつけられ、赤外線で体を暖めることができ

る。

小児精神科は、アシスタントと子供が週一回通って来て勉強する。幼稚園のアシスタントがこの先生に指導の方法を教わる。趣味として陶芸室がある。2階は作業療法士の階で、トレーニングキッチンがある。ここもテーブル、調理台、流しを使う人に合わせて上下する。バスルームもあった。医療ソーシャルワーカーは患者の家族の相談を受けたり、コミュニケーションの交渉などをする。裁縫士はベストなスタイルで座れるようにクッションを縫ったりする。エンジニアは補助器具の修理などをする。

ここで働く身体に障害のある女性の自家用車を見せてもらった。アメリカのクライスラーに注文したもので、背の高めのワゴン（RV車）である。リモートコントロールで横のスライド式のドアが開き、鉄の板が地面から車の床まで緩いスロープを作り、電動イスのまま運転席のすぐ後ろまで行く。運転席のシートは電動で回転し、彼女を座りやすくし、座り終わるとまた電動で正面を向く。ハンドルの周りにアクセル、ブレーキなど走行に必要な装置は全部ついている。彼女は他の自動車で練習してから、ある程度の補助を受けてこのクライスラーを購入したそうである。車をもつことで自由をえられ、ここで働く事ができた。特別な装置はこれ以上必要なく満足しているという。

さてハビリテーリングの3階は言語療法士がいて測定室、診療室、コンピュータ室があった。声帯や、使える筋肉を使って訓練する。

地下1階は補助器具の倉庫と作業療法士である河本さんが担当する感覚刺激知覚室があった。作業療法士は病気の原因以外のもの、補助器具を使ってどのように自立し、人間らしく生活できるようになれるかをサポートする。リラックスする部屋は全体に白っぽく、ウォーターベッドがおかれ、しずかな音楽、油が水とまざるような映像、ミラーボールの光……。

視覚障害の人にもいい暗い部屋もあった。この二つの部屋は手作りの感じがしたが、必要に応じて作られたもので今後も工夫がこらされていくのであろう。

[車イスを始めとして、補助器具や療法を一人

一人のニーズに合わせて、キメ細かく対応していた。クリスチャンが運転免許をとることが目標だといっていたのが、このクライスラーのRV車を見てよく理解できた。我々もウォーターベッドに横になり体験してみたが、ここで毎日の疲れを癒したいと思えた。／照敬]

[プールを見た。運動が大切ということが判った。地下の感覚知覚を刺激するという部屋がおもしろかった。ウォーターベッドは気持ちが良い。暗い部屋は不思議な感じがした。／真観]

9月4日 9:50 グループホームで会ったロッタが働いているトレーニングセンターへ行く。すぐ前が公園で、パルコメーラン Parkm 嗟 lan という。ここはトレーニングと補助器具の展示と食堂があった。

補助器具を展示しているサービスハウスは今年4月に改装オープンした。上は住居になっていて老人や障害者が住んでいるとのこと。このサービスハウスでは、補助器具を実際に購入することができる。コンピュータもロビーのようなところに置いてあって、来所した人はそれを使うことができ、コンピュータでいろいろな情報を集められる。一日に30~50人の方がここを訪れる。レストランの方もたくさんの方が利用し、アレルギーの人にも対応した食事を出す。2年前までは年金生活者のサービスハウスだったが、コミュニケーションが障害者の人にも利用できるサービスハウスとした。会議室はハンディキャップのある人々には無料、他の人は有料である。展示トイレも3種類あり自分に合っているトイレがどのタイプなのか試すことができる。それは、立ったままできる便器、人工肛門を洗うことができる装置、低い便器、オムツの人のトイレ、前後からお湯がで、熱風で乾かせる、洗面台は電動で上下する、などがあり、われわれは実際入ってみた。われわれにも欲しいものばかりであった。展示室にあったベッドは電動で4段階に上下するが、その上に敷かれたマットは心地よい堅さがあり、魅力的であった。ベッドは9800クローナとのこと。テンピュールマットという名前前で、マットだけでも販売しているらしいことまで調べてくれた。そのほか、目の不自由な人も楽しめる卓球のようなもの。4つ玉のビリヤードが

置いてあった。ここの事務所にあるパソコンはインターネットを利用して、血液の在庫や薬などの情報を調べることが可能である。

[はじめはロッタがスポーツセンターで働いているところを見せてもらう予定だったが、ちょうど休憩時間にはいってしまっていた。なおスポーツセンターは特にハンディキャップをもった人のためのものではなかった。改装オープンしたばかりのためか補助器具の展示はまだ少ないように感じられた。日本に帰ってからまったく同じスウェーデン製のテンピュールマットレスを三越日本橋店で販売していることが判った。ちなみに販売価格は98,000円。／照敬]

[ここの食堂でお昼を食べた。豚肉とジャガイモ。おいしかったけれど量が多かった。ロッタも一緒に食べた。／真観]

1:00 ハーダーへ行く。技術的な補助器具を開発しているところというべきか。HADARにはAmi-Syd, Amu Hadar, Samhall Hadarの3つがあり、それを統括しているのが財団法人ハーダーである。Ami-Sydは労働環境・教育に身体障害者をいかに適合させるかという業務を行い、ここで将来の職業を選択する。Amu Hadarはコンピューターを利用して、さまざまな将来就業に必要な技術を取得させる。Samhall Hadarは身体障害者が就職、転職できるように労働訓練をする。

われわれは会議室でハーダーの説明を受ける。1987年、この事業を開始し知覚障害の人のための教育をした。最初のチーフであったスベンウールベイン自身が知覚障害をもっていて、コンピューターを補助器具として使い始めた。基礎的なコンピューターの知識から、生活向上のための補助器具として応用していく。次にコンピューターを使っている職業訓練をする。それは今すぐ必要な職業訓練と将来必要になるであろう訓練である。45週間学習し、図表作成、新聞作り、情報処理などさまざまな勉強をする。クラスは5種類、1クラス6~12人いて時間はフレキシブルである。ハーダーの人は生徒の一人一人のことを考えて教育し、補助器具もその人にあったものを開発し使っている。生徒のほうから希望した事柄に対して担当者(学

校に行っている人なら先生)と専門家(作業療法士)、仕事場(社長なり)で、どのようにしたら目標に向かえるか討議する。仕事が適合しなければ別の職場をみつける。

この組織は補助金をもらっている。いまわれわれはAmi-Sydにいるが、コンピューターをやりたい人はAmu Hadarへ連れて行く。Samhallは就職した仕事場の一つである。一通りの説明が終わってわれわれはコンピューターのたくさんおいてある部屋に案内された。作業療法士が実際動かしてみせてくれた。頬に補助器具をはり、舌でクリックできるもの、足でローリングしてクリックできるもの、フロッピーに補助器具をつけ手の震えるひとがドライブに入れやすく工夫されたもの、コマンドもいろいろ変えてあったり、アルファベットだけを大きくしたキーボードなどがあった。次に、イェシュカさんが、別のコンピューターの説明をしてくれた。ディスプレイの上においた装置から光を発し、眼鏡の真ん中の部分に反射鏡のようなものでうけて、ディスプレイの画面に出ているキーボードを操作するものには感心させられた。指やあごでディスプレイの画面を触って操作するコンピューターや息を吸ったりはいたりしてクリックできるもの、音声カプラーによって入力できるものもあった。日本語の音声カプラーは標準語しか判断できないときいたことがあるが、ここのは125種類の違った音声を捉えられるようになっていた。目の不自由な人は点字の文字盤で入力でき、コンピューターが声を出していま何を入力したかわかる。40,50で視覚障害になった人はコンピューターから声のでたほうがいい。

ピアさんは、プログラミングの仕事をしていて、ハーダーで教育をしている。機能障害もしくは知的障害によって社会適応が困難な人のためにコンピューターを通して訓練をしている。まずコンピューターの構造の理解教育を行う、そして簡単に目標に到達できるような教育をしている。現在は6人の生徒と勉強しているが、その6人はそれぞれ別のコースをもっている。個人個人の能力を見極め、望んでいることを見つけていく。同じプログラムをするのにも人によってかかる時間が異なる。技術を習得して仕事に結び付けることが目標である。基礎が終われば外に実習に行く。

コンピューターでの買い物の勉強は、トレーにものを載せてレジにもって行き、「19クローナ」という音声が出て、100クローナで支払い、おつりは81クローナ、といったことをする。音声と画面で結果が判り、少しできるようになったら、メニューを増やしていく。字の読めない人は、聞くことによって勉強できる。

[Ami-Syd、Amu Hadar、Samhall Hadarの区別はよく判らなかったが、コンピューターを実生活に生かしていると思った。日本ではコンピューターがあふれているが実生活に生かしきれていないのではないか。／照敬]

[ぼくもコンピューターを使った勉強をしたこともあったけど、ここのコンピューターは外国語でしなければならぬので、操作できない。応接室で聞いたお話はむずかしかった。夜、よし子さんのいたハビリテーリングでヤングチームの始めた喫茶店でゲームをしたのが楽しかった。／真観]

9月5日 9:50 学校 Munkuhatte Skolanへ行く。身体障害児の受け入れの多い学校で、1年から9年生がいる。日本でいえば小学校と中学校にあたる。低学年、中学年、高学年になっている。校内に車イスの子が多く見える。言語療法士のマイアムさんと作業療法士の人に対応してくれた。学校の様子を映したビデオを見せてくれる。

以下はビデオのナレーションから。

「ここの学校は普通の学校ですが身体障害者がいます。普通の子もいます。統合教育がなされており、35人の障害をもった子、その中の何人かは知的障害をもっています。コミュニケーションをもつのが困難な子、集中できない子、視覚障害児、学習遅滞児がおります。たくさんの方のプロフェッショナルがおり、ハビリテーリングのチームがここにいます。アシスタント、ソーシャルワーカー、オキュペーションサービス、それにドクターもこちらにきます。ときには車イスの技術者もきます。ですからこの子供たちは病院へ行く必要がないのです。インディビジュアル・サービス・プログラム (I. S. P.) (個人々に応じたプログラム) があり、なにか問題が起こったときはチームと家族が集まり解決の方法を探します。ミーティング

で議論が行われる時は、一般的な情報を述べあい、何が必要かを検討する。学校での生活だけをみるのではなく、子供の人生についてみますので多くの人が必要になってきます。(場面がかわって) この教室はスペシャルグループです。床に座って勉強するのは車イスにばかり乗っているのもよくないからです。知的障害の子は何かのコースに入っています。パーソナルアシスタントが補っています。これは高学年が地理の勉強をしているところです。プラクティカルワーク、金属と木、手芸、家庭科は部分的にスペシャルグループと統合されています。デジタルセンサーがついているミシンのまえにちかづけばミシンは動きだし、離れればミシンは止まるようになっています。4人のグループは何をもってこようか、というのをしています。A. D. L.とは日常の生活訓練です。ご飯を作り、掃除をしたりします。グループの取り出し方は、普通のカリキュラムの中で特別指導を行います。同じ問題をもっている子を集めます。たとえば体育では身体的障害がある子を集めます。グループの会議の時、生徒が要求していることにたいしてディスカッションして、どのようなグループを作るかを決めます。

会議に生徒が参加することによって、生徒自身の能力が判り、能力開発に生徒たちは責任をもって取り組むことになります。もちろん子供が小さい時は会議には加わりません。作業療法士が自分のことは自分でできるようにとの目標をもってトレーニングしているところです。バターを塗ったりしてサンドイッチを作るのですが、もう少し身体を起こしたほうがよい、とか近づいたほうがよい、と指導をしています。補助器具を身体に合わせているところです。食堂でアシスタントに食事を食べさせてもらっています。鏡があると自分がどのくらいこぼしているかが判ります。言葉をしゃべらない子供にボードを指さしてコミュニケーションをとり勉強しているところです。手話もしない子供にブリスボードでコミュニケーションをとります。1週間に1回しています」(ブリスボードはチャールス・ブリスが1948年科学記号を使って世界中で通じる言葉にしようと始めた。1970年代、カナダの障害者センターで再びとりあげたもの)。ブリスボードで表示したキーボードをコ

ンピューターにつないでいるのもあった。

ビデオが終わってから校舎を見学した。コントローラーでドアが開く。理学療法士が体育をしていた。ここに来ていることはいいことですか、との質問に「素晴らしい、補助器具があるし、車イスが動きやすいようにできているから」と答えた。彼女は特殊学級の教師の勉強をしているらしい。生徒の中には、最初他の普通学校に入って3年4年になってからここに来る場合もある、という。この学校の施設は程度が高く、マルメ市でもここにしかないプログラムがある。他の学区から来ている子もおり、物理的な問題でどこにも行くことができなくてもここへは来ることができる。80キロも遠くから来ている生徒もいる。

マルメの全部の学校をこのように改造する必要はないように思われる、とのことであった。コンピューター室、セラピーの部屋、テレビカメラが隣の部屋のテレビにつながっている。両親の授業参観ができる。ポリシーはハビリテーリングとおなじである。ハビリテーリングからチームが出向してきている。「学校ではアシスタントが見つからないので周りの子供がつくことはないのか」との質問に「小さいときはお互いに助け合うこともあるが中学年では勉強が忙しくなって、学ぶ権利が侵害されないようになっている」とのことであった。統合教育することによって健常者もハンディキャップの人とどうやって生活していくか勉強になるのである。ルンド大学の教育学部と隣接しており、この学校は実験校としての役割を果たしているそうである。帰りがけにブリスボードをプレゼントしてくれた。

[実際、生徒たちに授業しているのを見学できなかったのは残念であった。ここの先生方は常に前向きで、一人一人の生徒にとって、どうするのがいいのか、を真剣に考えている。日本の教師が（それは一部としたいが）余計なことはしたくない、というのとはかけ離れている。／照敬]

[学校は広くて、エレベーターは前も後ろも開いておもしろかった。お昼はかな子さんの先生と大学の食堂で食べた。学校の生徒がどんなことをしているのかを知りたかったけれど、ビデオで見ただけだった。／真観]

1:50 ロッタのグループホームの職員が教えてくれたアネット (ANETT) の住むグループホームを訪問する。アシスタントと職員が出迎えてくれる。リルも来てくれていた。アネットは奇麗にお化粧して待っていてくれた。スウェーデンにきてからは、それほどお化粧している人を見かけなかったが、やはり演劇人としての自覚からそうするのであろうか。

ロッタのグループホームと似ていて真ん中に皆の居間があり、5人のそれぞれの個室がある。アネットのベッドにはスペシャルマットがしかれ、自分のことは全部自分でできる。スケボーの大きいような物は理学療法士が見つけてくれた。ボードは朝夕の入浴の時便利である。シャワーが低いところについていた。3、4年前から演劇をやっている。モムス (劇団の名) からはお金は入らないが、年金で暮らせていける。コロンボーイ学校という特殊な学校へ19歳まで行き、演劇はデイセンターでやっていた。デンマークとオランダへ公演に行ったが、今度はオーストラリアに公演に行くそうである。国からの補助ももらえるが自分たちの力でいく。マルメでは9月20日から公演がはじまる。確かにブタの首をもった男の大きなポスターをあちらこちらで見かけた。彼女は子守の役である。

ここのグループホームは3年前にできて、町よりやや離れている。毎月4000クローナ、自分のスペース分支払っている。基本的には住宅補助ももらっていて、親からの援助はない。ご飯はパーソナルと一緒に作る。1週間に1度は共通の居間にいて朝夕のご飯を皆と一緒に作り食べる。その間、パーソナルが部屋を掃除する。1ヵ月に1回位親に会う。ちょっと寂しい。家に帰る日は自分で決め、食べたいものを決める。「グループホームに何か問題は」、との質問に、「何もない」とのことだった。パーソナルは交替でくる。夜もいる。幼稚園は特殊学級にいったそうである。出掛けるときはタクシーが迎えに来る。途中で療法士が車イスの点検にきた。果物をぜひ食べて行って欲しいという。帰りがけに、9月20日から始まる演劇のポスターをくれた。

[職員の一人に個人的に尋ねたら、ここの施設

はマルメでも最上級のものらしい。アネットが両親と1ヵ月に1回位会うのを、ちょっと寂しい、といったのが気になった。日本のように自宅介護で親族が疲れ果ててしまうのも困るがスウェーデンのように、自立自立と親から離さるのがいいのかしばし考えさせられてしまった。／照敬]

[アネットの住むグループホームは、遠かった。空もきれいだった。ジュースをいただいた。ちゃんとシャワーとか自分で生活してられるのは偉い。／真観]

9月6日 9:50 サフィーレン (SAFIREN) へ行く。

福祉関係の勉強をしたという所長のスサンヌさんが応対してくれた。このデイセンターは8月7日にできたばかりである。彼女は専門の教育を受け、3年前は他のデイセンターの昼間の補助をしていた。そこには70~80人の障害をもった人がいた。彼女の経験では、最初はいろいろの障害の人が混って活動したほうがいいと思っていたが、どうしても重度の人の方にサービスが集中してしまうので、分けて活動している。また、ここは知的障害をもつ人の施設で木工や手芸の活動は、身体障害の多いデイセンターで行われるから力を入れていない。

1階のデイセンターでは21人の人通ってきている。そのほとんどが重度の知的障害をもっている。そのうちの3人は軽度なので台所を手伝っている。ここでは人間関係を勉強するのに人形を使う。

2階は知覚・感覚訓練室である利用者がパーソナルと来て使う。いろいろなことが試せる。皆は見ただけでなくいろいろ試さねばならない。多くの人はいろいろな刺激を与えられて来たが、自分から何かをやるという意志がなければ発達はない。視覚障害の人には、聴覚や嗅覚を刺激するようになっている。

スウェーデンでは21歳まで特別学校で学び、その後、就労が困難な人はデイセンターへ行く。ここは新しい施設なので人気がある。ここの活動では一つの目標に向かってグループを作っている。また、外の仕事場へ実習に行ったり、各個人が違った活動をする。職員は外部とコンタクトをとっ

て、どこの職場に連れて行くか決める。その人その人に合った情報を集めて供給するのである。環境を工夫し、単語を勉強するにも絵を見せて認識させ、考えることができるようにしていく。ハンディキャップのある人はここに入って直ぐにその部屋がどんな部屋なのか認識できるようにしてある。身体障害者にも視覚障害者にとってもムダなドアを開かなくてよいのでよい。キッチンの戸棚はすどうしのガラスで中が扉を開かなくても分かるようになっている。台所で働いているグループ以外のグループにはそれぞれ名前がついている。それらは、バニラ、ラベンダー、キャデルーナという3つの香辛料からとった名前である。それぞれのグループの部屋の前に匂い袋がつるしてあって、匂いによって自分のグループだということが認識できる。視覚障害の人は今はいないが、重度の知的障害者は視覚障害を伴う場合が多く、嗅覚を使つての認識を重視している。匂いで自分の部屋に帰って来たことが分かるのである。

その3つのグループは朝、集まりローソクをたて、ソフィーレンに来たことを認識する。日常活動は常に同じことをするのが大切である。毎日、同じ音楽をかけ静かに各自に話しかける。そのことによって他の人が、他に誰が来ているか認識できる。

利用者2人と先生1人、一対一、いろいろである。ここに通う人は重度の知的障害者なので、それぞれにパーソナルアシスタントがついている。このセンターにきたら、センター職員が利用者についた方が、センターへ来たんだということを認識できるのだが、予算の関係でそれはできない。大きな人数のグループをつくって、自然を勉強することがある。理学療法士と皆で海へ行くこともある。言語療法士に言葉を習う。花なら匂いがかがしたりする。生クリームを泡立て器で泡だたせ、「回す」という言葉を教える。スサンヌさんがなにをするか決めることもあるが、グループの担当の先生が何をするかを決める。デイセンターの人は2階に来ることはない。自然を勉強したり、料理したり、音楽をする。

ここでの勉強は身体を使うことをメインにしている。例えば両方の足はここにあると、認識させる。車イスから降りし、マットの上に載せてオイ

ルを塗ってマッサージをしながら身体の部分を分かるように知らせる。一回マッサージすると自分の身体の部分が分かり、更に刺激が入っているので感覚は鋭くなっている。ウォーターベッドの上でマッサージをすることもある。運動訓練とコミュニケーションのためにバブルバスに入れたりもする。マッサージで身体を触れられるのがいやだという人には、近くにいてさわらずに教える。

外から刺激を与えることによって、活動を自分でできるようになるのが、これからの新しい方法で、われわれが目指しているところであると説明があった。また、彼らに安心感を与えることも大切であり、同じ職員がいつも同じ人につくことによって安心感を得るので職員はなるべくかわらないほうがいいそうである。また、理学療法士は車イスの生徒を立たせてみて、視点を変えることによって、どこに何があるか、見せるという新しい日常に則した訓練もしているこうすると座ったり、寝転ぶことで違った視線が得られ刺激になる。

また、自分の部屋に帰ってくると他の人のシグナルを受けて理解する、ということを勉強をおこなう。たとえば、茶碗を出した人がいればコーヒーが欲しいのだと判る。

視覚障害の人はコーヒーがあるのを匂いで感じ、茶碗をもって飲んで認識させる。一つの行動に移るときにはシグナルがある。食事の時間がくればフォーク、ナイフ、スプーンを触らせて、これから食事に行くんだと認識させてから連れて行く。安心感から自分の部屋から動きたくない人もいるが、フォーク、ナイフ、スプーンを触れることによってらせれば食事に行くことが先に判り、安心して行ってくれるようになる。もう少し能力のある人は、ピクトグラムという絵のかいてあるスケジュール表を渡しておけば、次に何をやるか判る。患者の所へバスが迎えにいくと、どこへ行くのか判らない人には、シンボル（カバンとか）を見せて、デイセンターへ行くのだと判らせて安心させる。攻撃的な人は不安があるからそうなることが多い。同じことを繰り返すのが重要である。

いまここに実際に通っている人は25歳から35歳だが、21歳から65歳まで通ってもいいことになっている。障害者年金をもらっているわけだが、65歳以上になったらゆっくり寝てみたいだろうか

ら、65歳までとなっているのである。65歳を過ぎて、ここの活動が終わったら、健常の人と同じで、その後の援助はしない。今、学校へ行って人がたくさんいるので、多くの人が将来入って来ることであろう。2人の作業療法士、4人の職員、そのうち一人は理学療法士、1人の言語療法士、1人のアクティビティがいてアクティビティはここでは料理やスキーを教えているが、他のデイセンターでは木工や手芸をやっているかもしれない。

これから、各部屋を見学させてもらった。黄色の階段は刺激しやすいし、紫色のてすりは美しくないと思われるかもしれないが、黄色と対照的な色なのでわざと使っている。ドアにはピクトグラフがはってある。これが判るのは高いレベルの人である。パーソナルルームのドアには新聞紙、洗濯室のドアには洗剤がトイレのドアにはペーパーがつるしてあり、音楽室の前にはいい音のする風鈴のようなものがつるしてある。なかには雨のふる音が出る楽器などいろいろ置いてあった。人と話すことが苦手な人でも人形なら話せる人もいたので、操り人形がある。それは男の人形でなぜかという、ここには男の職員が一人しかいないので。車イスの人は地面にある砂をなかなか触れないので、廊下に台で少し高い位置にした箱庭のようなものを作り、砂に触れるように工夫している。鏡の壁もある。大きく見えるのや色々の鏡がある。壁に引き出しをつけて、引くとへビのおもちゃが飛び出す引き出しや食べ物が入っている引き出しがあったりする。

聴覚の障害の人がウォーターベッドで身体全体で振動を感じたり、クッションも柔らかいのや堅いのや、毛皮がビニールより柔らかいと感じさせる。ウォーターベッドの部屋が一番人気があり、空の雲がゆっくり動いて行く映像が壁に映り、リラックスできる。暗い部屋は視覚障害の人にもよい。白黒の対照がはっきりしている。音に反応するオバケの人形がつるしてある。黒い幕の中は、音と反応して豆電球が光る。これらは河本佳子さんの勤務するデイセンターで見せてもらったものとほぼ同じである。透明の箱の中に鳥の羽がはいっていてボタンのおしかげんで羽はいろいろの飛び方をするのが判る。次の部屋は黄色と赤色の直径6~7センチのボールがたくさん入ったプール

があった。ボールの中に身を埋められる。黄色と赤色の中でもやや暗い色のボールが入っていてそれを見つけたりする。手をたたくと電気がついたり、空気のマットレスでシーソーのようになっている。一人が先に寝ていて、他の一人がマットレスに飛び込むと、先にいた人が弾き出される。ウォーターベッドの白い部屋とは対照的なアクティブな部屋である。他にスコネ地方の特色が出ている田園風景や鳥の模型がおいてある部屋、マッサージの部屋はピンク色で、鏡で自分の身体を見せながら、本人であるということを確認させるようだ。景色の見える部屋、向こうに見えるのはデンマークである。前の白い建物は老人のための日常訓練所で、たまにその人たちと一緒にになにかをすることもあろうである。

バブルバスは2人で向き合って入りお互いにマッサージしあう。職員と患者で入ることもある。バブルバスをやりたくない人は休むところを設けて見せていると、見てるうちに入るようになることもある。腕の浮輪が掛けてあった。寝たままでも入れる。ここも天井にはリフトがついていた。

リルが来てくれた。職員のスサンヌさんも外まで出て見送ってくれた。

[非常にきれいな施設だった。いままで視察してきたところよりはやや小ぶりといった感じである。ここも1階に通って来ているハンディキャップのある人たちとは直接交流できなかったが、今後の交流の課題ではないだろうか。／照敬]

[人形とか、ピアノをひいてみたりした。ウォーターベッドも気持ちよかった。ボールの一杯は入っているプールに入って遊んだ。ここに来る人はみんな楽しいに違いない。／真観]

13:30 FUBとの懇親交流会に行く。

FUBは障害のある子供をもった親の会である。スーパーマーケットの地下にFUBが運営している余暇センターがあり案内してもらおう。地下にセンターがあるがタクシーはここまで降りて来られるから車イスの人も安心して利用できるのである。小さい子供が集うところや、ペインティングをしたり、陶芸ををするところには電動ろくろと手動のろくろがあった。手芸、絵画などの活動もしてい

る。ここに来る人は水曜日か木曜日を選んで半年通って参加費は500クローネである。12月はロシア祭を行う。ローソクをたくさんつけてサンタ・ロシアの歌をうたう。

ここには8人の余暇の先生が交替で来ている。5つのグループがあり、陶芸や絵をかいいたりする。台所もありパンを焼いたり、コーヒーを入れたりする場所もある。案内してくれたメンバーは、親の立場でボランティアとして来ている。

ここで初めてボランティアという言葉を見たような気がする。スウェーデンではパーソナルアシスタントを始めとしてハンディキャップをもった人をサポートする人々は全て無料のボランティアではないと聞いていたのである。

余暇センターは午後7時から9時50分まで開いている。全体では180人入ることができ、テーマ週間には季節にあった食物をたべたり、議論をする。親がなにかをする時はいつでも使用できる。一年間の予定は完全にプランニングされていることはなく、ケースバイケースで対処している。行事の開催やホールの使用の予定は機関紙に発表され、事務所には連絡すればすぐ空いているかどうかはわかる。水曜日と木曜日のグループの活動には16歳から20歳の人に参加するが、親はついてこない。

親もその時間フリータイムになってよいのである。最近絵を塗り替えた。絵は自分たちで描いた。典型的なスコネ地方の様子を描いており、ピーレヴァレという草に特徴が見られるようだ。1ヵ月に一回は安全装置の点検を行う。ステージのついた部屋で音楽を演奏したり、重度の子のための音楽室もあった。真観が日本の歌舞伎などでやっている太鼓を演奏してみせた。

月に二回、金、土、日曜日にバスで青年の家へ行って宿泊する活動もしている。それには知的障害の人のみが参加し、余暇活動の専門の先生がついて行く。

一階のFUBの事務所にもどってお茶を飲みながら懇談をする。

一人の母親は現在コミュニンのアダルトスクールへ行って現在勉強をしている。一般的な事務職についていたがハンディキャップをもった子供が生まれたので会社をやめた。

彼女の場合3人の子供がいて、真ん中の子供が軽い知的障害があり、35歳で魚釣りの疑似餌を作る会社でパッキングの仕事をしている。

スウェーデンではハンディキャップをもってもわりと多くの方が仕事をもてる。彼は生まれたときは障害はなかった。5～6歳でてんかんの障害が出た。現在のような社会福祉システムができたのは1970年代であった。そのとき医者は何も治療しなかった。知的障害が出て来て特別学校へ行った。彼が小学校に入るときには、それしかなかった。彼は学校へ行っている間、テストを受け、どの程度の障害なのか自分たちでみていった。FUBとしては全体の統合教育を目標に掲げている。国としても重度のハンディキャップをもつ子供には5人の先生が必要だがそれは難しいことであり、それぞれの子供がそれぞれの要求をもっているからなかなか実現しがたいことであろう。600人のメンバーがいるが、熱心に活動している人は5パーセント位である。われわれも日本でどのような状態で障害を知り、どう対処して来たかを話した。帰りには、FUBのTシャツをプ

レゼントしてくれた。この交流はもう少し時間をとりたかった気がする。

[FUBの人たちは、われわれがいままでしてきたこと(闘ってきたともいえるが)と同じことをして、いまのサービスが得られるようになったのではないだろうか。

それは初めに訪問したクリスチャンの両親にもいえることである。日本がいくらハンディキャップのある人に対して遅れてるとはいえ、ハンディキャップのある人もしくは親族が声を大にして主張しなければ何も始まらないのである。今まで面会した人々にはそれぞれ誠実に対応していただき、感じのよい印象ばかりであったが、とくにクリスチャンの一家とFUBの人には共感と親しみを抱いた。/照敬]

[子供が親から離れてグループごとに活動しているのはいいなと思った。その人たちが作ったビーズや絵や壁に描いた絵を見たけど芸術的だと思った。音楽室でぼくは、太鼓をバチで叩いてみんなに聞いてもらった。/真観]

地域・草の根視察交流メンバー

1	是 永 かな子 KANAKO KORENAGA	(通 訳 ・ 記 録)
2	渡 邊 照 敬 WATANABE SHOKEI	(交 流)
3	渡 邊 真 観 WATANABE SHINKAN	(交 流)
4	海老原 昭 朗 EBIHARA AKIO	(交 流)
5	海老原 宏 美 EBIHARA HIROMI	(交 流)
6	佐々木 亜 紀 SASAKI AKI	(写 真 ・ ビ デ オ)
7	伊 藤 裕 子 ITO YUUKO	(写 真 ・ 録 音)

参考文献

「スウェーデン便り 太郎へ ピッピより」
藤田雅子著 日本評論社
「スウェーデン四季暦」 訓覇法子著 東京書籍
「スウェーデンの生活者社会 地方自治と
生活の権利」 藤岡純一著 青木書店
「スウェーデンの経済」

岡沢憲芙・奥島孝康編 早稲田大学出版部
「スウェーデンの社会」
岡沢憲芙・奥島孝康編 早稲田大学出版部
ファクトシート スウェーデンの障害者政策
Molmö Statistisk Årsbok 1995
Statistisk Årsbok96

地域・草の根視察先団体概要

●Södertorps Dagcenter

ソーデルトルプス デイセンター

(知的障害をもつ人のためのデイセンター)

マルメ市にある10のデイセンターのうちのひとつ。

職員数は、パートタイムも含め26人。利用者は53人。利用時間は、午前8時30分から15時45分まで。

ソーデルトルプスデイセンターでは、成人心身障害者向けの日々の活動が行なわれている。

○目標：以下の事柄を重度の心身障害の人のためにサポートし、高めていくことを目標としている。

1. 団結意識
2. 社会参加
3. 主体性
4. 自信
5. コミュニケーション
6. 運動神経

(一部資料訳)

●Hjälpmiddelscenter

援助支援センター (補助器具センター)

ルンド大学附属マルメ市立総合病院のなかにある。受付午前8時30分—午後3時15分

木曜日は、午前8時30分—午後2時。昼休み12時—午後1時。

支援・サービスの内容

1. 情報と教育
2. 補助器具の展示
3. 成人のためのハビリテーション
4. 住宅適応
5. 技術援助方法
6. カウンセリング、顧問責任
7. 発展技術サービス
8. 車の適応

○援助方法の中心になるもの

1. 処方に関するアドバイス
2. 援助手段の必要判断

3. 処方の適応と使い方の練習(一部の援助手段)

4. 住宅適応へのアドバイス

○援助方法相談員

相談員は、援助方法の専門家である作業療法士、または理学療法士である。彼らは必要性を判断し、援助手段を試し、使用者の情報を親戚、介護人、行政機関にアドバイスをする。相談員は、住居/住宅の適応に参加し、住居適応の質問のための照会先グループを統合している。さらに在庫品、品揃えを選ぶための処方者と利用者が入っている照会先グループをもまとめている。

●Barn-och ungdomshabiliteringen

ルンド大学附属マルメ市立総合病院の中にある。受付午前8時30分—午後3時15分

木曜日は、午前8時30分—午後2時。昼休み12時—午後1時。

介護・リハビリテーション・ハビリテーションの理念

- 患者の介護は、介護にかかる人件費の問題ではなく、患者にとっての必要性である。
- 当然、誰でも介護を受けることができますが、重度障害者に重点をおく。
- 現在の経済では、品質にも重点を置かなければならない。
- 重要な点は、質の良い看護を提供すること。例えば、

1. 介護の空き数/余地数
2. 職員数 (空き数/余地数があっても、職員数も大切)
3. 時間 (職員数があっても時間も必要)
4. 介護の持続性
5. 利用しやすいこと

— 環境を整えることの必要性(例えば、設備面)

○パーソナルアシスタントの重要性

1. パーソナルアシスタントは、家族、親戚など本人をよく知っている人が前提。
2. どこへでも、一緒にいてくれる人。
3. 患者の回復には、パーソナルアシスタント

は不可欠。

4. パーソナルアシスタントは、一般職員のかわりではない。

(一部資料訳)

●ニア パークモーラン (Nya Parkmollan)

サービスセンター

1. 私たちのインフォメーション/知識センターには、あなたに機能障害と社会についての質問に答えてもらう。そうすると、あなたは、自分の使っているコンピューターで私たちのデータベースを利用することができる。

「ヨーランとエヴァが”インフォメーション/知識センタ：I K” にいて喜んであなたの手伝いをする。

2. 援助手段の展示は、可能性と多くの問題の良い解決法を示している。
3. 会議/相談部屋は、ニア パークモーランの集会所の一部である。授業、会議/相談、展示等のための空間です。
4. スクールレストランでは、平日のランチと日曜日の夕食を提供している。サンドイッチ、クッキーなど全ての食べ物、内容が申告されている。運動障害に関わらない、アレルギーのない物は、食べるようにしよう。
5. トレッフアプンクテンには、コンピューターがあり、あなたは自分のデータベースを作ったり、ビリヤード等のゲームができる。またあなたは、補助機具を見に来ることも、注文をすることも出来る。

(一部資料訳)

●ハーダー Hader (Handikapp Datorer Arbete Rehabilitering)

身体障害者・コンピューター・労働・再復帰を目指す法人である。

ハーダーは、マルメ市の研究都市イデオンにある労働市場研究所の Ami-Syd と AmuHadar と Samhall Hader が統合されて、身体障害者の社会復帰と労働市場への復帰を共通の目的として設立された機関である。その財源は22の企業や団体によって出資されている。

Ami-Syd はいろいろな労働環境についてそして、労働教育において身体障害者を適応させることが

できるかという観点についての専門的な知識と経験があり、実用的な職業選択や身体機能適正判断も行っている。身体障害者はここで様々な職業を試験的に行い、将来の職業選択を行える機関である。

AmuHadar は、教育と社会復帰のための専門的な情報があり、その根底にはコンピューターを利用することによって将来就業できることを可能にする新技術による教育を行う。

Samhall Hader は、身体障害者が就業あるいは転職できるように労働訓練のプロジェクトを開始している。

ここで身体障害者は、文書及び映像の登録業務の専門知識を習得することができる。

ハーダーは、ルンド大学の CERTEC (社会復帰技術センター) との共同作業によって社会復帰技術の研究と開発を進めている。

またランスタング (県) の労働管理局の依頼を受けて、ハーダーでは様々な職場調査や身体障害者のための技術的改良を含めた基礎および実務職業教育を行ったり、企業や社会保険局の依頼を受けて各職種に対応した社会復帰のプログラムを作製している。

そしてハーダーは、県および市町村の依頼を受けて学校や家庭でのコンピューターを利用した補助設備施設の供給センターとなる役目を果たしている。

ハーダーは、身体障害者のために努力をおしまない関係機関と協調することによって人材と技術を有効に活用することができる。身体に障害をもつ人の新たな可能性に関する情報提供を行っている。そして身体障害者のための新しい就職への道を開拓するため、文化団体、印刷、マルチメディアの生産会社に対する登録業務を始めている。

(資料訳)

●ムンクヘッテ基礎学校 (Munkhätteskolan)

：障害者のための特別コースをもつ統合学校
ムンクヘッテ基礎学校は、1～9学年の生徒のための小、中学校である。1977年以来、運動障害のある生徒を対象としたコースのある学校である。当時、“統合”が、最初の(主要な)目標であった。全ての生徒は、普通クラスに席をおかれていた。

ところが、運動ハンディキャップのある生徒にとって都合の良いモデルのないことが、やがて明らかになった。個々の生徒に 配慮するためには、特別な教育（教授、指導）グループが必要であった。

現在、ムンクヘッテ基礎学校は、マルメコミュニオンとマルメ市議会から生徒の受け入れをしている。彼らは、親からの希望のがあり、ここに来ている。今日、私たちの生徒は、普通クラスに編入するが、しかし何人かは特殊教育グループに参加している。

普通教育やハビリテーリングの他に、運動障害をもつ彼らは、テーマの日、Blissグループ、会話グループ、体操及び車椅子訓練など全てのレベルを含んでいる活動に参加している。

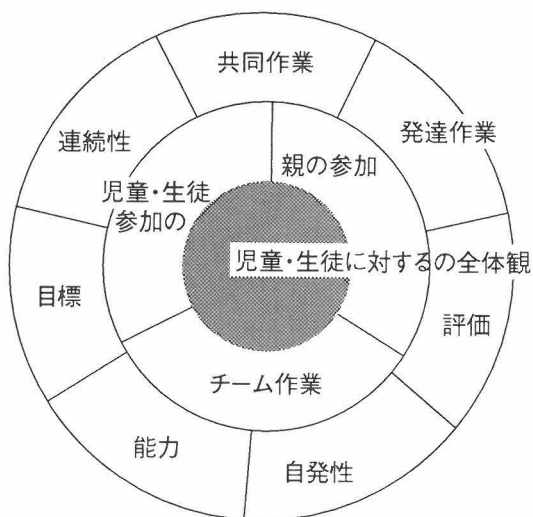
○ハビリテーリングから派遣された医療チーム、ムンクヘッタンチームの目標は、各生徒に 自分自身の条件（見通し）や興味にもとづいており、ハンディキャップは別にして、人生の 質を上げるために、適当な教育を与えることである。彼ら個々の目標は、生徒、親、そして ムンクヘッタンチームからの連絡員の間で、相談をしてくられている。

●SAFIREN サフィーレン(最新デイセンター)

今年の8月7日にオープンしたばかりのデイセンター

1階は現在重度の知的障害をもつ人達のためのデイセンターになっている。今のところ21人の利

○ムンクヘッタンチーム



用者が平日、通所している。

2階は6つの知覚感覚訓練室があり、一般に開放されている。それらは1部屋50クローナで借りることができる。

職員は2人の作業療法士,1人の理学療法士,1人の言語療法士,1人の運動訓練士 (Aktibitet) 1人の所長という構成になっている。

●FUB (För Utvecklingsstorda Barn, Ungdomar och Vuxna) 知的障害をもつ人の会

当初は親の会として発足したが、現在は当事者参加が重視され団体名を変更した。

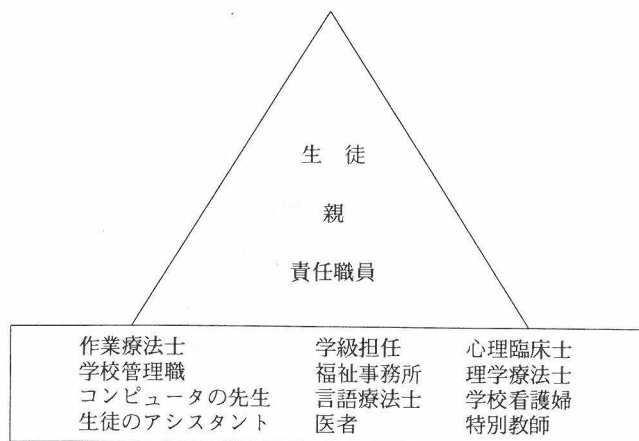
この団体の活動は、知的障害を持っている人達がよりよい生活を送ることができるための働きかけを行う。

現在の会員数は全国で36,500名、170の支部を持つ。マルメには600人の会員がいる。会員は知的障害児をもつ親や家族そして知的障害をもつ当事者自身である。

FUB-Kontakt と Staget という機関紙を発行しており、とくに後者は知的障害をもっている人のために平易な文で書かれている。

●Gruppbostad (グループホーム)

障害をもっていて1人で生活していくことが困難な人たちのために、職員が24時間体制で対応してくれる施設。成人用と子ども用がある。共有部分として中央にキッチンとリビングルーム、職員の滞在する部屋があり、その周りに各々の住居者



Team Munkhättan

ムンクヘッタンチーム

(資料記)

の独立した部屋がある。1つのグループホームには5,6人の居住者がいる。共有部分ではご飯を作って欲しいときや1人では寂しいときなどに利用する。また居住者には週に1日「家の日」(ヘンマダーグ; Hemmadag)があり共有部分で掃除や家事の練習をする。個人のスペースは1LDKまたは2LDKになっていて台所もバスルームもあり自立して生活することができる。自立を基本に、必要な援助を職員に要望する形になっている。

マルメ市と福祉に関するデータ

●マルメ市の人口 242,706人

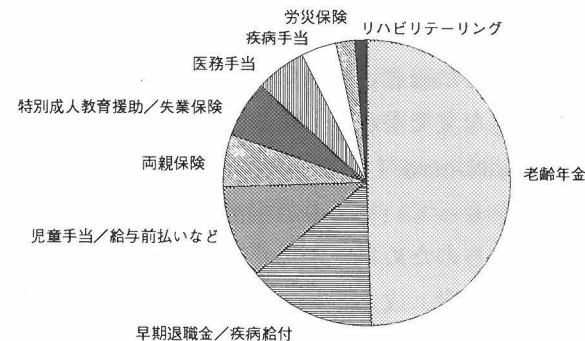
人口密度 1,579人

面積 153.7km²

●マルメにおける社会保険に関する支出

総計6,988百クローナ

マルメにおける社会保険に関する支出 1993/94
Total 6 988 Mkr.



●マルメ市において社会保険の

給付を受けているひと 1994年

人口比率 14.8%

男性 12,398人

女性 11,414人

0-18歳までの子ども 11,571人

実際に支払われた社会保険 (単位千クローナ)

616,306千クローナ

平均受給期間 5.5ヵ月

●マルメ市の社会福祉地区 1994年,6地区に区分されている。

1. 中央地区
2. 北東地区
3. 東
4. 西

5. 南

6. オクシー

●社会保険に依存する人の各地区の人口率%

1994年

中央地区 16%

北東地区 14%

東地区 25%

西地区 9%

南地区 16%

オクシー地区 7%

●1994年12月のからだの不自由な人のためのサービスの利用者数

アドバイス・支持 600人

パーソナルアシスタント 29人

コンタクトパーソン 90人

交代者サービス 114人

短期滞在

大人 46場所

子ども 56場所

日常活動(デイセンター) 425場所

●介護サービス 1994年

94年12月におけるサービス受給者の数

7,223人

タクシーによる片道介護サービス回数

964,100回

特別な乗り物による片道介護サービス回数

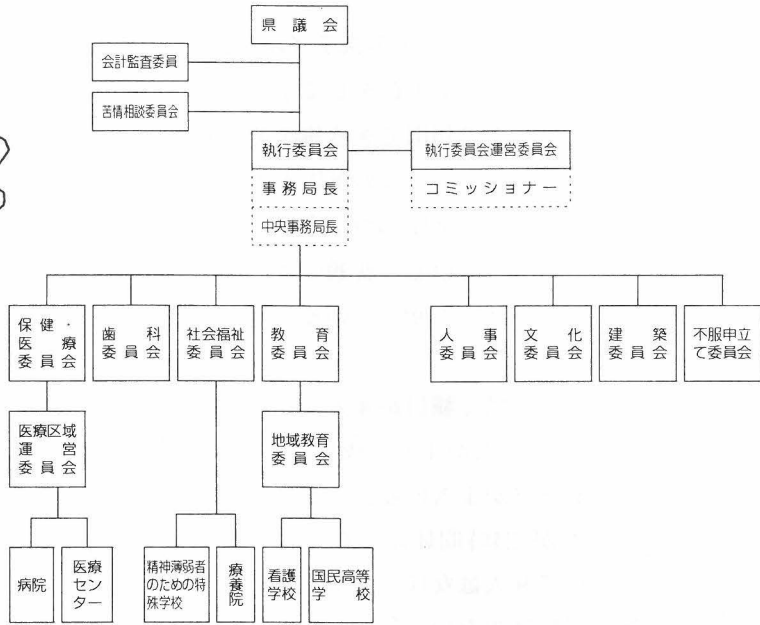
107,434回

一人当りの片道介護サービス回数

148回



県コミューンの政府組織の典型例



Socialtjänsten Malmö

社会福祉地区



福祉に関する参考資料

●コートティッドヘム (ショートステイホーム)

ここは、滞在ではなく親が予約をして子どもたちの面倒をみれないときに利用できる施設である。マルメ市のあるものの1つは、5つの部屋があり、2つは歩行可能な人のための部屋、3つは車椅子でも使える様にリフトがついている。普通のアパートを改造して1階部分の部屋を使っているがそれでも不足している。

職員は、週に37時間働く職員が4人、週に24時間働くパートタイムの人が4人、夜10、56時間働く職員が3人とチーフが1人いる。ここはショートステイホームだが、24時間体制になっている。職員は2人が男性で9人は女性である。一般に福祉の分野で働く男性は少ない。

親は2ヵ月前から予約ができ、利用回数等の制限はなく利用者の必要に応じて対応してくれる。利用の仕方は様々で、1日だけの利用者もいれば数週間利用する人もいる、また半年もここに人もいた。グループホームへの入所を待っていてずっとここに住んでいる人もいる。

現在50人(1994年)の利用者登録がある。子どもをあずかるときに細心の注意を払うため、登録するときには親と子どもが来所し、職員との面接をする。そして必要書類に子どもの詳しい情報を書き込む。

予約は重ならないように常時5人しか受け付けない。予約の多いときはウェイトリングリストが書かれるが、キャンセル待ちにしかならない。

ショートステイホームは、マルメ市に2つしかなく、0歳から21歳までの子ども用と16歳からの大人用になっている。需要は高く拡張が必要だが、今は予算に関係で難しい。経済的にかなり厳しい状況にある。

障害を持つ人が近くに住むことを嫌う人もいるため、障害者の施設をつくる場合には、どこか一部仕切って使うよりも、新築に最初から住んだほうが周囲の反対や抵抗は少ないそうである。

ショートステイホームの利用者のなかには、グループホームから気分転換に来る人もいる。ひとり暮らしをしていて寂しいときに利用することもで

きる。ここに住むのときは、無料でシーツなども貸してくれ、ここで洗濯をすることもできる。しかもここに滞在する人は、食事代のみ支払いをすればいい。

ここでの連絡には職員の日記があり、プライバシーの保護のため親にも見せない。その日記はこのショートステイホーム開設以来、10年間の記録が大切に保管されている。名前は黒と赤車椅子と歩行者とに分かれていて見やすく分けられている。

希望があれば外出にも付き添人がつく。また職員は、車をデイセンターなどから借りることができる。その場合は200クローナ程度お金を支払わなくてはならない。

障害をもつ人の気分転換、親の自由時間の保障、各々人間らしく生活するために必要な保障がされているように思う。親も子どもお互いにつぶれないように息抜きは必要である。

●作業療法士 (アルベーツセラペウト: Arbet-terapeut)

日常の作業を通じて機能回復訓練を行う専門家。日本にも資格として存在するが、スウェーデンの作業療法士は、日本のそれよりも病院や学校デイセンター、リハビリテーションなどに配置されるので、仕事が独立していて多岐にわたる。病院内においては医者や社会福祉士等とチームを組み、患者の治療にあたる。障害をもつ人には、家の改造や補助機具無償貸与の権利があるが、その際、作業療法士が専門的なアドバイスを与える。学校においても、障害を持つ人達の補助機具がうまく活用していくために子どもや教師に指導を行う。

資格習得には高校卒業後5年間、社会福祉に関する実地の経験を行い大学に入って1-2年の専門コースを取ることが必要である。

●言語療法士 (ログペード: Logoped)

言葉の指導を行う専門家。資格習得は高校卒業後現場での実習経験を得て、大学に入学し専門のコースを取る。言語障害や教育だけではなく理学や医学も学び、総合的な療法を提供する。

学校やデイセンターなどの現場で指導するのは言語障害児の指導を主に勉強した、言語指導士(トールペダゴグ Talpedagog)である場合が多いが、かれらを統括、管理する役割も持つ。彼等が使う教材として特徴的であると思われるのはブリス (Bliss) とピクトグラム (Pictogram) である。

ブリスは単語をアルファベットで表わす代わりに、シンボルとして絵で表わしたものであり、発話が困難な人のための補助機具である。発明した人は中国語の「へんとつくり」の構造をヒントに作られた。それらの絵が一つの表のようになったボードがあり、言語障害のある人はそのボードを差し示すことによって意思を表わす。

ピクトグラムは、言葉やアルファベットの理解が困難な人のための、絵を使った教材である。日本にも入っているが「非常口のマーク」などがそれである。特に知的障害をもっている人の状況の認識の援助のために使われる。

●障害者協会連合会 (マルメ) (Handikappforeningarnas)

一障害者協会連合会は、障害者の人生の質を高めるために働きます。そのために、一般の障害者政策の問題をかりたて、個々の会員協会 (組合) へ支持を与えることによって、私たちの会員協会 (組合) を利用 (管理) し、興味と知識をまとめ、管理するべきである。

○次のようなグループで、政策について意見を出すことができる

1. カルチャー、環境
2. 看護
3. 街の環境、建造物
4. 消費者指導 (意見)
5. L S S
6. 学校、保護者の疑問 (問題)

○次のような協力を定義した

1. 定期的な連絡
2. 適時、計画の変更についての情報
3. 地域に影響を及ぼしている調査委員会を知る
4. 委員会組織 (機関) - 変更、活動

草の根交流視察訪問先関係者一覧

	視 察 訪 問 先 名 称	担 当 者 氏 名	地 位 ・ 職 業
1	クリスチャン宅	クリスチャン・スワード Chrischan Swardh	コンピュータ技師
2	Södertorps dagcenter セーデルトルプスデイセンター (知的障害デーセンター)	マイ・ノルド Maj Nord ノル・ニイベリイ Lill Nyberg	所 長 デイセンター教師
3	リハビリテーリング Universitetssjukhuset MAS Barn och ungdomshabilitengen	マルガレータ・ニルソン Margareta Nilsson 河本佳子 Yoshiko Komoto (通訳・アレンジ)	総院長 作業療法士
4	補助機具センター Universitetssjukhuset MAS Hjälp medelscentral	アンナ・モンソン Anna Mansson	補助機具コンサルタント/ 作業療法士
5	ハーダー HADAR	ビクトール・フェールミシェク Victor fermischek ジェシカ・オーリン Jessica Ohlin	作業療法士 市場調査マーケティング 部主任
6	ムンクヘッテ基礎学校 Munkhatteskolan	リーサ・ハーデンシュッテト Lisa Hardenstedt	医療チームリーダー/ 作業療法士
7	最新デーセンター SAFIREN (サフィーレン)	スサンヌ・ロゼンストローム Susanne Rosenstrm	所 長
8	FUB I MALMO	マリアンヌ・ノードストローム Marianne Nordstrom	会 長
9	サービスセンター Nya Parkmollan	ヨーラン・スベンソン Goran Svensson	
10	リフト付きタクシー会社 TAXI90	Sten Rostbeg	社 長